市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

県営農村活性化住環境整備事業大里地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

MATU ONO BIRA I SEKI

松尾平遺跡

AN TOKU I SEKI

安徳遺跡

1995年3月

鹿児島県日置郡市来町教育委員会

序　　文

この調査は，平成４年度県営農村活性化住環境整備事業に伴って行なわれたものです。市来町にとっては，開発事業に関連して初めて実施した調査であり，全面的に鹿児島県教育庁文化課及び鹿児島県立埋蔵文化財センターのご指導のもとに調査を実施しました。

調査の結果，松尾平遺跡は広範囲にわたる貴重な遺跡であることが判り，全面発掘して記録保存することに致しました。全面発掘も初めての経験で，調査担当の県立埋蔵文化財センター調査員の方々にはたいへんご苦労をおかけ致しました。

調査の結果，多量の出土品・遺構がありましたが，中でもナイフ・剝片尖頭器などが埋蔵されており，本町にも旧石器時代の遺跡があったことや，県内でも珍しい縄文時代早期の格子状押型文土器古墳時代の住居址などが確認され，松尾平には，私たち祖先の長年にわたる生活の痕跡が残っている事が判りました。

調査期間中，調査・指導に当って頂いた方々及び発掘作業員の方々のご努力で，事故も無く，このように多くの成果を得る事が出来たことを，深く感謝致します。また，本報告書を刊行することに当り，この調査にご尽力下さった方々に厚くお礼申し上げますと共に，町民の方々が今後一層埋蔵文化財への理解を深めて頂き，郷土への愛着の念を高め文化財保護にさらにご協力下さいますよう，お願い申し上げます。

1995年３月

市来町教育委員会
教育長　松崎　　孝

報　告　書　抄　録

ふりがな	まつおのびらいせき・あんとくいせき
書名	松尾平遺跡・安徳遺跡
副書名	県営農村活性化住環境整備事業（大里地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	市来町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第3集
編集者名	新町正・長野真一・鶴田静彦・大久保浩二
編集機関	市来町教育委員会
所在地	㊡899－21　鹿児島県日置郡市来町湊町3305番地　ＴＥＬ　0996－36－3111
発行年月日	西暦　1995年　3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
松尾平 安徳	鹿児島県 日置郡 市来町 大里	4636 12	38 59	31度 43分 48秒	130度 17分 35秒	確認調査 19920803 ↓ 19920818 全面調査 19920907 ↓ 19921218	2000㎡ 15㎡	県営農村活性化住環境整備事業大里地区に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松尾平	包含地	旧石器 縄文早期 古墳	集石1基 住居址4基 溝1 土坑7	剝片尖頭器 台形石器 スクレイパー ナイフなど 条痕文土器 押型文土器 磨石・石斧・石鏃	
安徳	散布地	中世 近世		土師器 陶磁器	

例　　言

1．本書は，県営農村活性化住環境整備事業（大里地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は鹿児島県伊集院耕地事務所の受託事業として市来町が調査主体となり，県立埋蔵文化財センターに調査を依頼し実施した。

3．本書の執筆編集等には，市来町教育委員会の新町，県立埋蔵文化財センターの長野・鶴田・大久保があたり，遺物撮影には鶴田・新町があたった。確認調査は大久保・旧石器時代は長野・縄文時代は新町・古墳時代は鶴田が担当し，旧石器のコア・フレイク・剥片石器等は新町が実測トレースした。

4．発掘調査及び報告書作成については，鹿児島県文化財保護審議委員の河口貞徳氏の指導助言を得た。

5．本書に用いたレベル数値は，海抜絶対高である。

6．本書に用いた遺物番号は，土器・石器の種類に関係なく，各時代毎に通し番号とし，挿図・図版の番号と同一である。

本　文　目　次

序　文
報告書抄録
例　言
目　次
第１章　調査の経過
第１節　調査に至までの経過 …… 3
第２節　松尾平・安徳遺跡発掘調査の組織 …… 3
第３節　調査の経過（日誌抄） …… 4
第４節　位置及び環境 …… 6
第２章　出土遺物
第１節　安徳遺跡・松尾平遺跡確認調査 …… 8
第２節　旧石器時代 …… 12
第３節　縄文時代 …… 26
第４節　古墳時代 …… 33
第３章　まとめ …… 50

挿　図　目　次

第１図　周辺地形及び発掘区グリット …… 1
第２図　工事終了後の地形 …… 2
第３図　周辺遺跡分布図 …… 7
第４図　土層断面図 …… 9
第５図　松尾平遺跡トレンチ配置図 …… 10
第６図　安徳遺跡出土遺物 …… 11
第７図　旧石器時代１ …… 13
第８図　旧石器時代２ …… 14
第９図　旧石器時代３ …… 15
第10図　旧石器時代４ …… 17
第11図　旧石器時代５ …… 18
第12図　旧石器時代６ …… 19
第13図　旧石器時代７ …… 20
第14図　旧石器時代８ …… 21
第15図　旧石器時代９ …… 23
第16図　旧石器時代遺物分布・分類図 …… 25
第17図　遺物出土状況 …… 26

第18図　縄文時代早期集石遺構 …… 27
第19図　縄文時代の出土遺物（土器） …… 30
第20図　縄文時代の出土遺物（石器１） …… 31
第21図　縄文時代の出土遺物（石器２） …… 32
第22図　溝状遺構及び土壙７ …… 33
第23図　古墳時代遺構配置図 …… 34
第24図　溝状遺構出土遺物 …… 35
第25図　土壙１～６及び土壙内出土遺物 …… 36
第26図　土壙内出土遺物 …… 37
第27図　１号住居跡及び出土遺物 …… 39
第28図　２号住居跡及び出土遺物 …… 40
第29図　３・４号住居跡及び出土遺物 …… 42
第30図　Ｄ－８区遺物出土状況 …… 43
第31図　出土遺物１ …… 44
第32図　出土遺物２ …… 45

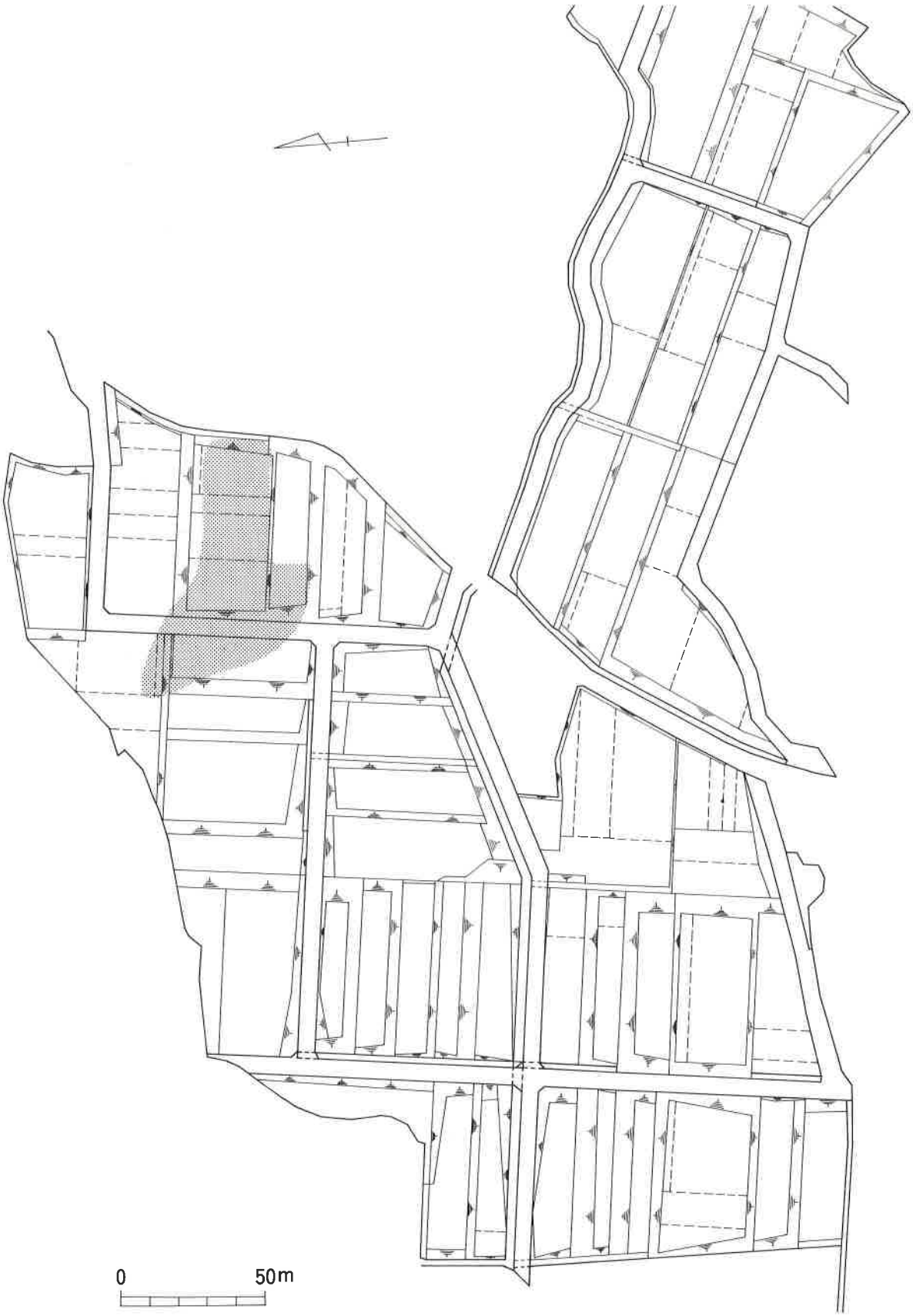
表　目　次

表１　松尾平遺跡周辺の遺跡 …… 6
表２　出土土器観察表 …… 29
表３　出土石器観察表 …… 31
表４　松尾平遺跡出土遺物観察表（１） …… 47
表５　松尾平遺跡出土遺物観察表（２） …… 48
表６　松尾平遺跡出土遺物観察表（３） …… 49

図　版　目　次

図版１　旧石器時代出土遺物 …… 55
図版２　発掘状況 …… 56
図版３　縄文時代出土遺物 …… 57
図版４　溝状遺構 …… 58
図版５　土壙及び住居跡 …… 59
図版６　住居跡及び古墳時代出土遺物（一） …… 60
図版７　古墳時代出土遺物（二） …… 61
図版８　古墳時代出土遺物（三） …… 62
図版９　安徳遺跡出土遺物 …… 63

第１図　周辺地形及び発掘区グリット



第２図　工事終了後の地形

第１章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

市来町大里に所在する松尾平遺跡は，平成３年度に鹿児島県教育庁文化課が実施した「北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書」によって遺跡として周知されている。この大里地区に開発事業が平成３年度から実施されており，年次的な計画に基づき，市来町教育委員会は鹿児島県文化課・伊集院耕地事務所・市来町経済課との間で，遺跡の取り扱いについて事前に協議を重ねた結果，遺跡の性格・範囲等を明確にするため確認調査を実施する事にし，調査を県立埋蔵文化財センターに委託した。確認調査の結果，遺物・遺構等が確認できた為引き続き全面発掘調査を実施する事となる。

第２節　松尾平・安徳遺跡発掘調査の組織（平成４年度）

調査主体者	市来町教育委員会		
調査責任者	市来町教育委員会	教育長	松崎　孝
調査事務	市来町教育委員会	社会教育課長	橋口正己
	市来町教育委員会	派遣社会教育主事兼係長	吉嶺　梓
	市来町教育委員会	社会教育主事	永井秀喜
	市来町教育委員会	公民館係長	古木照代
	市来町教育委員会	社会教育指導員	山下昌人
	市来町教育委員会	公民館指導員	若林秀雄
調査担当	県立埋蔵文化財センター	文化財主事	長野真一
	県立埋蔵文化財センター	文化財研究員	鶴田静彦
	県立埋蔵文化財センター	文化財研究員	冨田逸郎
	県立埋蔵文化財センター	文化財研究員	湯之前尚
	県立埋蔵文化財センター	文化財研究員	大久保浩二
調査指導者	鹿児島県考古学会	会長	河口貞徳

報告書作成組織（平成６年度）

調査主体者	市来町教育委員会		
調査責任者	市来町教育委員会	教育長	松崎　孝
調査事務	市来町教育委員会	社会教育課長	橋口正己
	市来町教育委員会	派遣社会教育主事兼係長	木原健一郎
	市来町教育委員会	主事補	奥之園　勝
	市来町教育委員会	庶務係	上原郁代
	市来町教育委員会	公民館係長	古木照代
	市来町教育委員会	社会教育指導員	山下昌人
	市来町教育委員会	公民館指導員	若林秀雄
報告書担当	市来町教育委員会	主任	新町　正

市来町教育委員会	主事補	西久保　敏　彦
県立埋蔵文化財センター	文化財主事	長　野　真　一
県立埋蔵文化財センター	文化財研究員	鶴　田　静　彦
県立埋蔵文化財センター	文化財研究員	大久保　浩　二

調査企画においては，鹿児島県教育委員会文化課文化課長向山勝貞（現松陽高等学校校長）・参事辻優（現霧島国際音楽ホール＜みやまコンセール参事）・主任文化財主事兼埋蔵文化財係長吉元正幸（現南種子高等学校教頭）・鹿児島県立埋蔵文化財センター所長大久保忠昭（現野田女子高等学校校長）・次長兼総務課長水口俊雄（現鹿児島南高等学校事務長）・主任文化財主事兼調査課長戸崎勝洋（現鹿児島県教育委員会文化課主任文化財主事兼埋蔵文化財係長兼県立埋蔵文化財センター調査課長）の各氏指導・助言を頂き，報告書作成に至っては鹿児島県文化課・県立埋蔵文化財センター所長内村正弘・次長兼総務課長川原信義・鹿児島県教育委員会文化課主任文化財主事兼埋蔵文化財係長兼県立埋蔵文化財センター調査課長戸崎勝洋・その他埋蔵文化財センター職員の各氏に指導・助言を頂いた。

発掘調査作業員

川畑貞見・三原清志・出下清藤・吉信岩雄・堀ノ内稔・三原和美・宇都盛行・紙屋敏　浩・久保秀和・三原イチ子・徳重あや子・宇都エミ・宇都ヨネ・福田ミツ子・宇都ミヨ・中池スミ・出下つき子・吉信サダ・堀ノ内用子・宇都ケイ子・橋口稲美・平川カズ子・宇都タツエ・中池ふよ子・橋口ミエ子・福田和子・本鍋田きぬ子

整理作業員	市来町教育委員会	児　玉　千香子
	埋蔵文化財センター	春　山　まり子
	埋蔵文化財センター	高　倉　晴　美

第３節　調査の経過

確認調査は，平成４年８月３日から８月18日まで安徳遺跡，松尾ノ平遺跡と両方にまたがり実施された。調査の結果，安徳遺跡については遺物遺構等は検出されなかったため工事着工に支障はないものと判断された。松尾ノ平遺跡については，遺物等が検出された部分は設計変更が不可能なため全面調査を実施することとなった。

全面調査は，平成４年９月７日から12月18日まで行われた。以下，その経過について週ごとに略述する。

８月３日（月）～８月７日（金）

安徳遺跡・松尾ノ平遺跡の確認調査開始。器材を２遺跡分に別けて調査にはいる。安徳遺跡は，拡幅部分に沿ってトレンチを設定。松尾ノ平遺跡は，地形に応じてトレンチを設定。

８月10日（月）～８月12日（水）

安徳遺跡は，表層よりの遺物はあるもののそれ以下からの出土は見られず。松尾ノ平遺跡は，Ⅱ層より成川式土器出土，またⅢ層より縄文時代早期の集石遺構も出土する。

８月17日（月）～８月18日（火）

両遺跡とも，土層写真，土層図等の作成。本週をもって確認調査を終了する。

9月7日（月）～9月11日（金）

発掘器材搬入，プレハブ設置等を行ったのち発掘開始。グリッドを設定，重機による表土剝ぎを行い，C・D・E－7・8・9区のⅡ層検出開始。

9月16日（水）～9月18日（金）

B・C・D・E－7・8・9区の掘り下げ。土器集中箇所をD－8区にて検出。

長期研修生（東市来町教委上園氏）現場研修。

9月24日（木）～9月25日（金）

D－8区遺物集中箇所実測。C－4・5区にても遺物集中箇所検出。B・C・D－4・5・6区のⅡ層検出。

9月28日（月）～10月2日（金）

A・B・C・D・E－2・3・4区Ⅱ層検出。土壙・住居跡等の遺構上面プラン検出。

10月5日（月）～10月8日（木）

1号住居跡・2号住居跡の検出。土壙も4～5基ほどあるようだ。

10月12日（月）～10月16日（金）

1号・2号の実測及び3・4号住居の検出。1号・2号住居の写真撮影。土壙が全部で6基検出。土壙1・2・3の掘り下げ。

10月20日（火）～10月23日（金）

3号・4号住居跡の検出。4号住居跡よりほぼ完形に近い壺形土器出土。土壙1・2・3の写真撮影。

10月26日（月）～10月30日（金）

今週で長期研修生上園氏現場研修終了。土壙4・5・6の検出。この3ヶの土壙は接近しており，土壙5・6はもともと同一の土壙のようだ。

11月2日（月）～11月6日（金）

剝片尖頭器出土。その他黒曜石の剝片が続々と出土。台形石器数点出土。C・D・E－9区にかけての溝状遺構の検出。V字状の溝状遺構となる。

11月9日（月）～11月13日（金）

調査区西側に旧石器時代の遺物包含層の広がりを確認。台形石器数点がさらに出土。C・D・E－9区にかけての溝状遺構の精査。

11月16日（月）～11月20日（金）

E－7区において溝状遺構を切る形で土壙7を検出。掘り下げ。その結果方形で深い土壙であることが判明。調査区西側の旧石器時代の遺物包含層検出，剝片等の出土多し。

11月24日（火）～11月27日（金）

溝状遺構及び土壙7の実測，写真撮影。旧石器時代の包含層の検出及び遺物取り上げ。

11月30日（月）～12月4日（金）

調査区全体の遺構図作成。旧石器時代遺物包含層の検出。

12月7日（月）～12月11日（金）

旧石器時代の遺物包含層の検出，出土状況写真撮影及び遺物取り上げ。

12月14日（月）～12月18日（金）

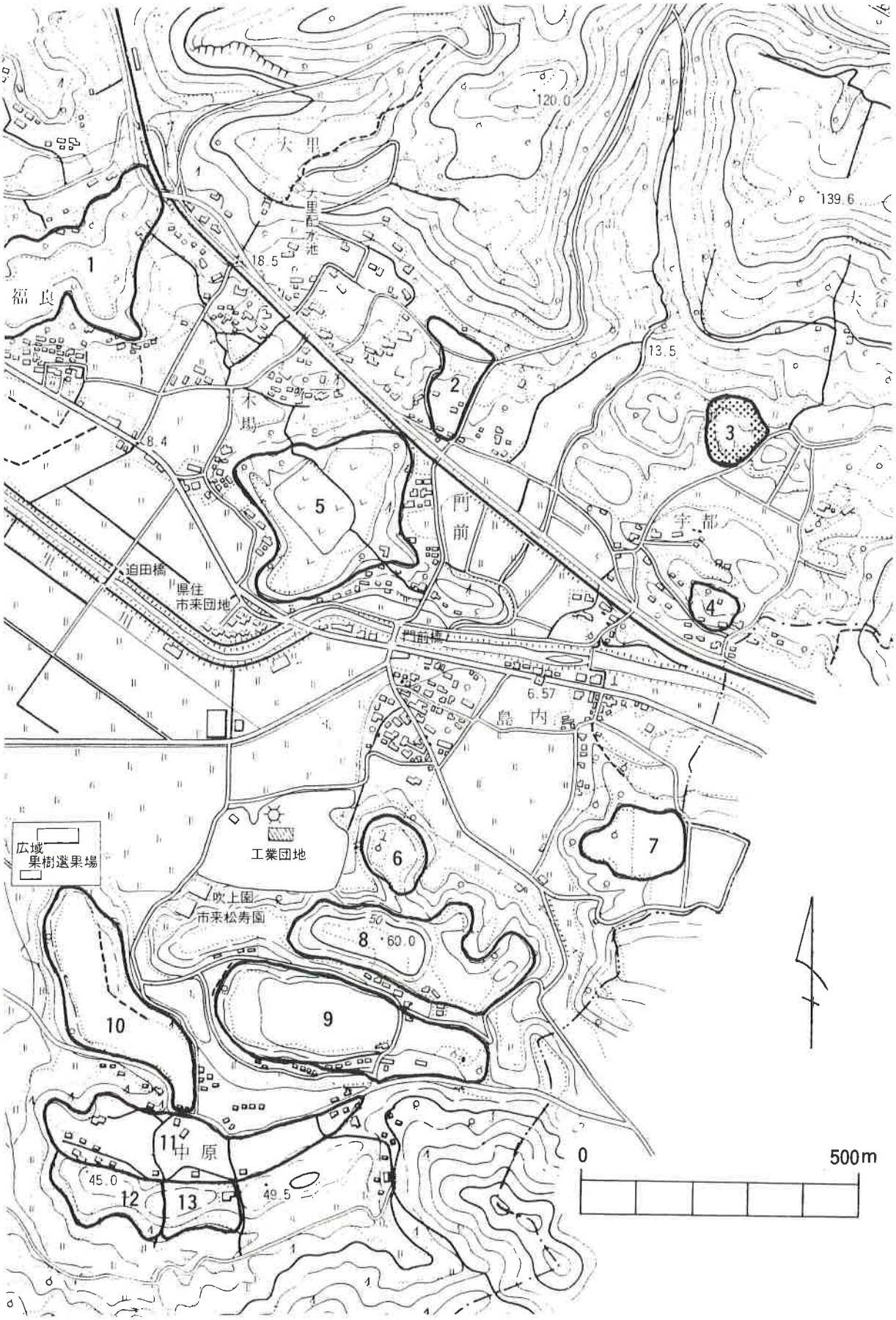
本週をもって発掘終了。機材・プレハブ撤収。出土遺物を町教委へ。現場引き渡し。

第４節　位置及び環境

市来町は日置郡の最北端に位置し，北は串木野市と接し，南から東には東市来町と接している。東側は山地が多く，西側には吹上浜があり毎年ウミガメが産卵にやってくる自然に溢れた町である。市来町の総面積は3,156㌶で，北東から南西にかけて細長い。また町内には，矢岳の北東斜面にその源を発している八房川・重平山の北東斜面にその源を発している大里川・観音ケ池にその源を発している重信川等があり，八房川は支流まで含めた全長約22.8㎞で，重信川は約2.9㎞，大里川は約24.5㎞である。この川沿いには多くの遺跡が存在しており，現在62ケ所確認されている。そのほとんどは平成３年度に鹿児島県教育委員会が分布調査を行い発見されたもので，それ以前は13ケ所の遺跡の存在が確認されていただけである。平安時代は延喜式の記載で市来の駅名が記され，鎌倉時代には市来院が置かれていた。また，丹後の局関連の史蹟も多く見受けられ，丹後の局休憩石・薩摩渡瀬・船着場・丹後の局の墓とされている方柱墓塔のある来迎寺墓塔群・鎌倉を離れて婚姻を結んだ惟宗廣言の墓のある鍋ケ城等がある。城廓にしても中世に遡り川上氏の居城と一般にされている川上城・重信川添いに存在し弥生式土器も表面採集されている重信城・平成５年度に市来町教育委員会が確認調査を実施した上城・詰城・平成６年度に確認調査及び全面発掘調査を実施した鍋ケ城等が上げられる。62ケ所の遺跡の中には古くは旧石器時代の瀧之段遺跡・戸崎原遺跡から，縄文草創期と考えられる丸ノミ形石斧が表面採集された小原遺跡，縄文時代後期の南九州を代表する市来式土器の標識遺跡の市来貝塚等がある。無形民俗文化財で言えば国指定の七夕踊りがあり，毎月８月７日に近い日曜日に開催され，多くの観客で賑わっている。

表１　松尾平遺跡周辺の遺跡

	遺跡名	所在地	地形	時代	備考
1	上城・詰城跡	大里上城・詰城	台地	鎌倉	市来氏
2	本寺屋敷	大里本寺屋敷	畑地・墓地	古墳・中世・近世	成川式土器・土師器・陶器
3	松尾平	大里松尾平	丘陵	古墳・中世・近世	土器・土師器・陶器・旧石器
4	安徳	大里安徳	丘陵	縄文～古墳	
5	鍋ケ城(惟宗広言の墓)	大里木場迫	台地	10 C ～ 13 C	墓塔１基
6	来迎寺	大里来迎寺	台地	縄文・中世	黒耀石・土師器
7	上ン原	大里島内上ン原	台地		磨製石斧・土器片
8	妙見前	大里妙見前ほか	台地	古墳・中世・近世	土師器・青磁・陶器
9	東園	大里東園ほか	台地	古墳・中世・近世	土器・土師器・陶器
10	半崎堀	大里半崎堀ほか	台地	弥生・古墳・中世	土器・土師器・陶器
11	西ノ鼻	大里西ノ鼻ほか	台地	古墳・中世・近世	土器・土師器・陶器
12	下諏訪	大里中原下諏訪	台地	縄文	土器片・打製石斧
13	中諏訪	大里中原中諏訪	台地	古墳	土師器片・須恵器片・近世


大里
大里配水池
福良
木場
門前
宇都
迫田橋
県住
市来団地
門前橋
島内
工業団地
広域
果樹選果場
吹上園
市来松寿園
中原
120.0
139.6
18.5
13.5
8.4
6.57
60.0
45.0
49.5
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
0
500m

第３図　周辺遺跡分布図

第2章　出　土　遺　物

第1節　安徳遺跡・松尾平遺跡確認調査

確認調査は，農村活性化住環境整備事業大里地区内に所在する，安徳遺跡と松尾平遺跡について実施した。期日は平成4年8月3日（月）から8月18日（火）の，実働10日間である。

1　調査の組織

調査主体	市来町教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	松崎　孝
調査事務担当	〃	社会教育課長	橋口正己
	〃	社会教育係長	吉嶺　梓
	〃	社会教育主事	永井秀喜
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	長野真一
	〃	文化財研究員	冨田逸郎
	〃	〃	湯之前　尚
	〃	〃	大久保浩二

2　調査の概要

(1)　安徳遺跡の調査

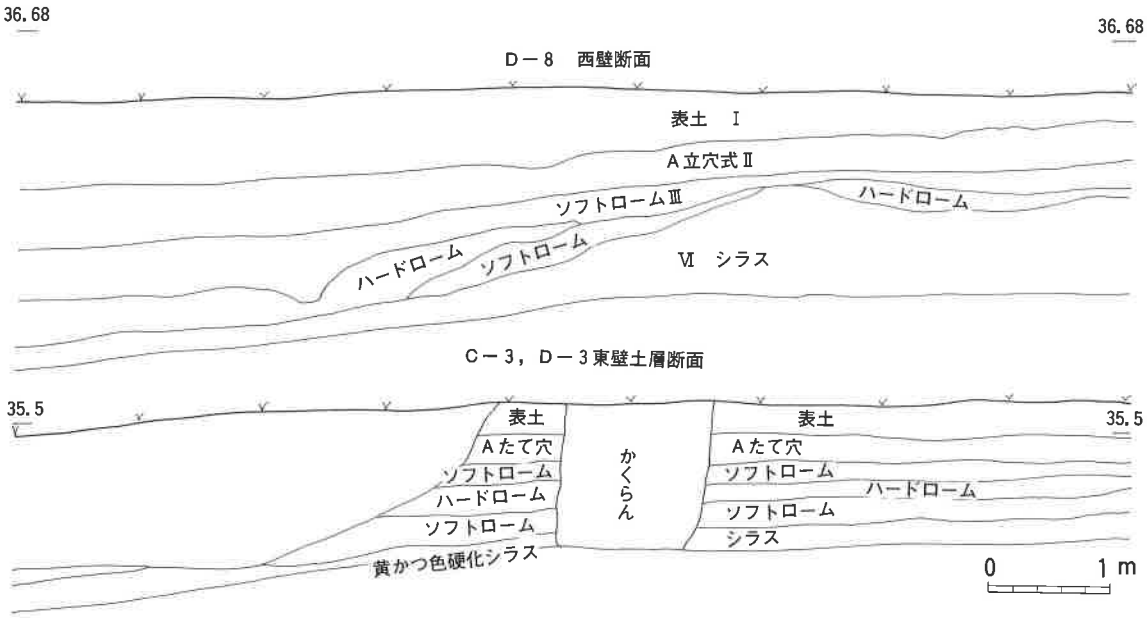
安徳遺跡は，道路拡張部分（約15㎡）を全面的に発掘した。その結果，包含層は残存していないことがわかった。ただし，攪乱層中から土師器・青磁・近世陶器・滑石製品などが出土した。（第6図）

1は内黒土器の椀である。底部の小片で，口径・器高は不明であるが，復元した底部径は約8㎝を測る。外方に踏張る浅い高台を持つものである。時期は9世紀後半が想定される。2・3は土師器の小皿である。底部には糸切りの痕跡が明瞭で，2は口径8.4㎝・底部径6.3㎝・器高径2.2㎝を測る。3はやや小振りで，口径7.5㎝・底部径6.3㎝・器高径1.8㎝である。4は用途不明のものである。縁辺部は摩製石斧の刃部状に加工されており，円形か楕円形を呈していたと考えられる。一面は加工痕を残さないように丁寧に仕上げられているが，その裏面には，ノミ状工具の加工痕が一部に残っている。また，中央には盛り上がっていた部分が剝がれたような痕跡があり，横方向に穴あるいは溝が掘り込まれている。

(2)　松尾平遺跡の調査

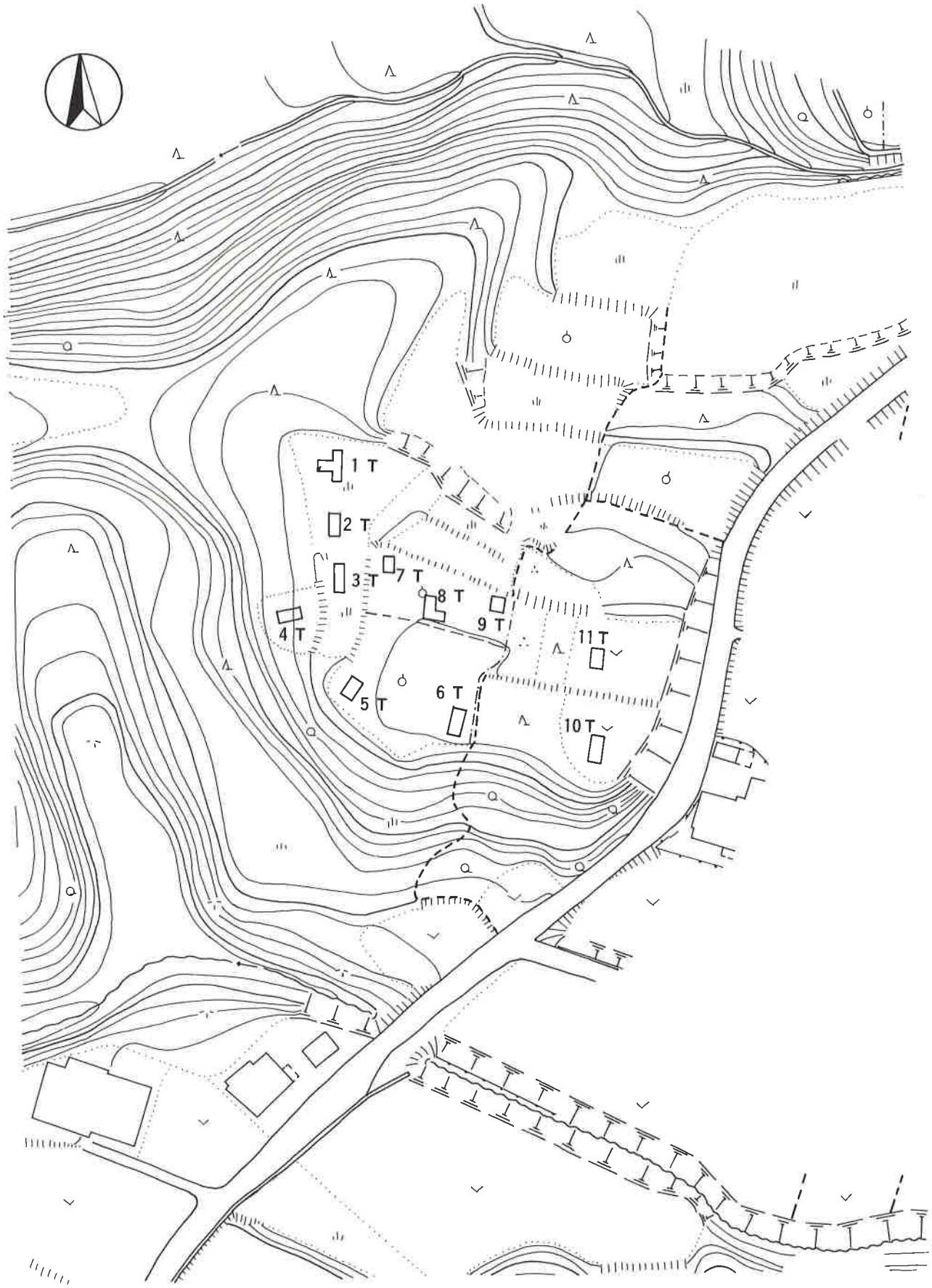
松尾平遺跡は，11ケ所のトレンチを設定して調査を実施した。（第2図）トレンチの大きさは2×5ｍを基本とし，状況に応じて拡張した。その結果，1Ｔ・3Ｔ・4Ｔ・7Ｔ・8Ｔ・9Ｔ・11Ｔの各トレンチから遺構・遺物が確認された。

出土した遺構・遺跡については，1トレンチからは縄文時代早期と考えられる集石遺構1基と土器片，3・4・7トレンチからは古墳時代の土器片，8・9・11トレンチからは縄文時代晩期の土器片が出土した。

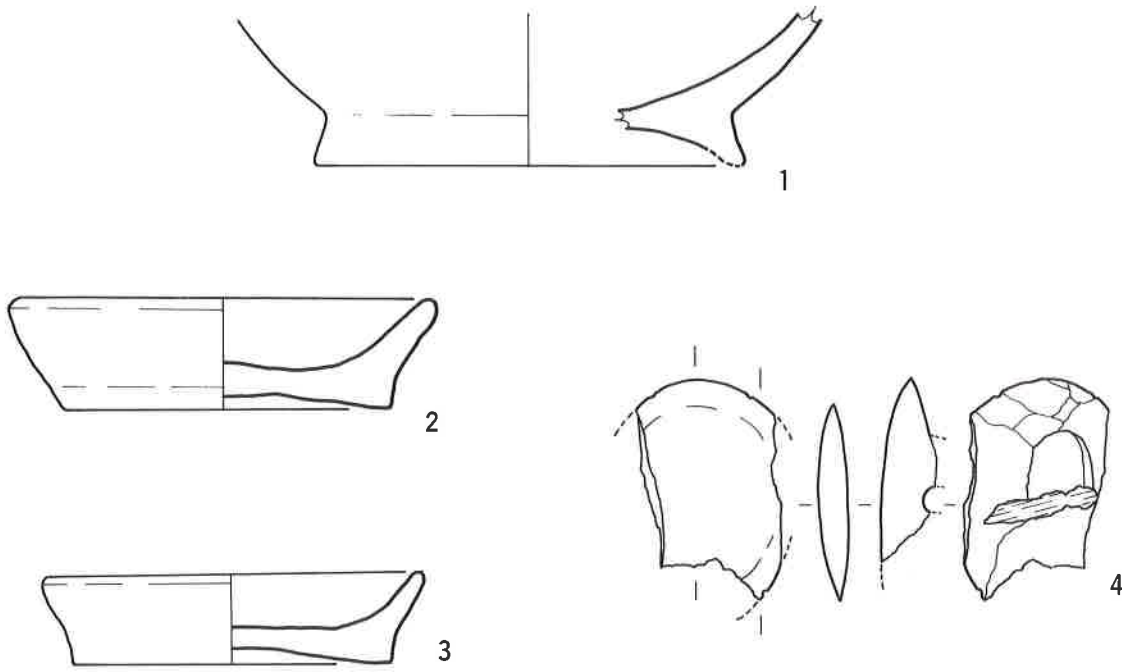


第4図　土層断面図

基本土層		「出土遺物」
Ⅰ　層	耕作土	
Ⅱ　層　アカホヤ2次	橙色火山灰土	成川式土器出土
Ⅲ　層　ローム	肌色粘質土	押型文土器 条痕文土器 } 出土
Ⅳ　層	暗茶褐色粘質土	旧石器時代遺物出土
Ⅴ　層	シラスをベースとした堆積物	
Ⅵ　層	シラス（硬化）	



第５図　松尾平遺跡トレンチ配置図



第６図　安徳遺跡出土遺物

第２節　旧石器時代

１　台形石器

18点が採取されているが，形態的におおまか４種類に区分することができる。

１類

１・２・３・４・６の台形石器である。これらは，一側縁部を分割面で構成するもので，分割した素材剥片を横位に用い，素材剥片の側辺を刃部としている。６を除くと石器の背面を構成する複数の剥離面の剥離方向は，基本的に同一方向からの連続的な剥片剥離が行われたことを示している。また，主要剥離面の剥離方向も背面と一致している。１・２・４の刃潰し加工は打面と分割面に限定され，特に打面の除去に注意が図られている。なお，刃潰しは主要剥離面から背面にかけて行われる。

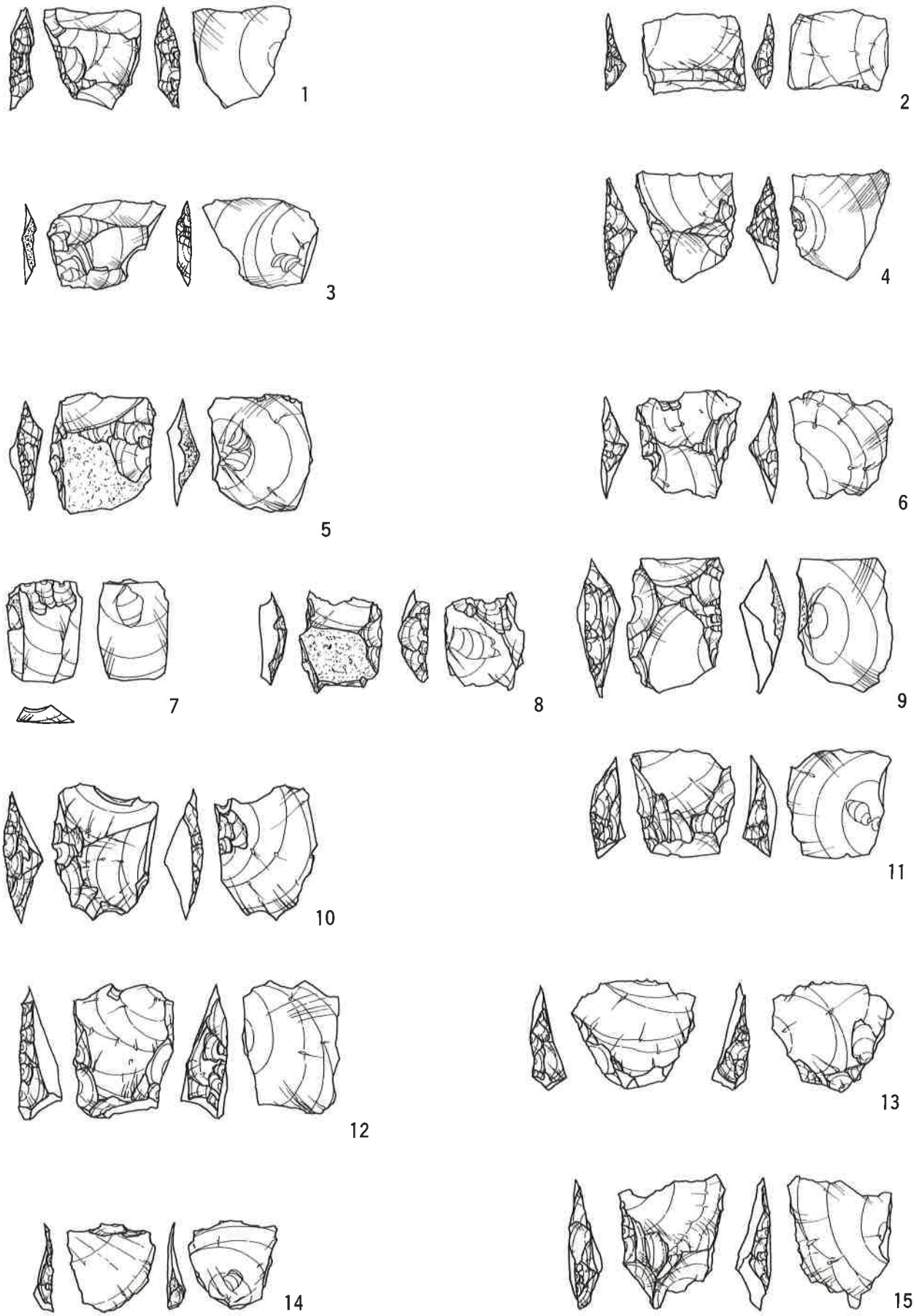
２類

５・８・９・10・11・12・15の台形石器である。背面に残される剥離面を観察すると，これらが求心的に剥離されたことを示し，さらに，背面の形状は不規則で起伏に富んでいると言える。素材剥片の個性は製品にそのまま残り，石器の最大厚部は中心軸から外れる。11と12と15の３点は打点方向に，他は打点とは反対方向に最大厚部が来る。刃潰し加工は15の左側縁の一部を除いては，全て主要剥離面から背面にかけて行われている。

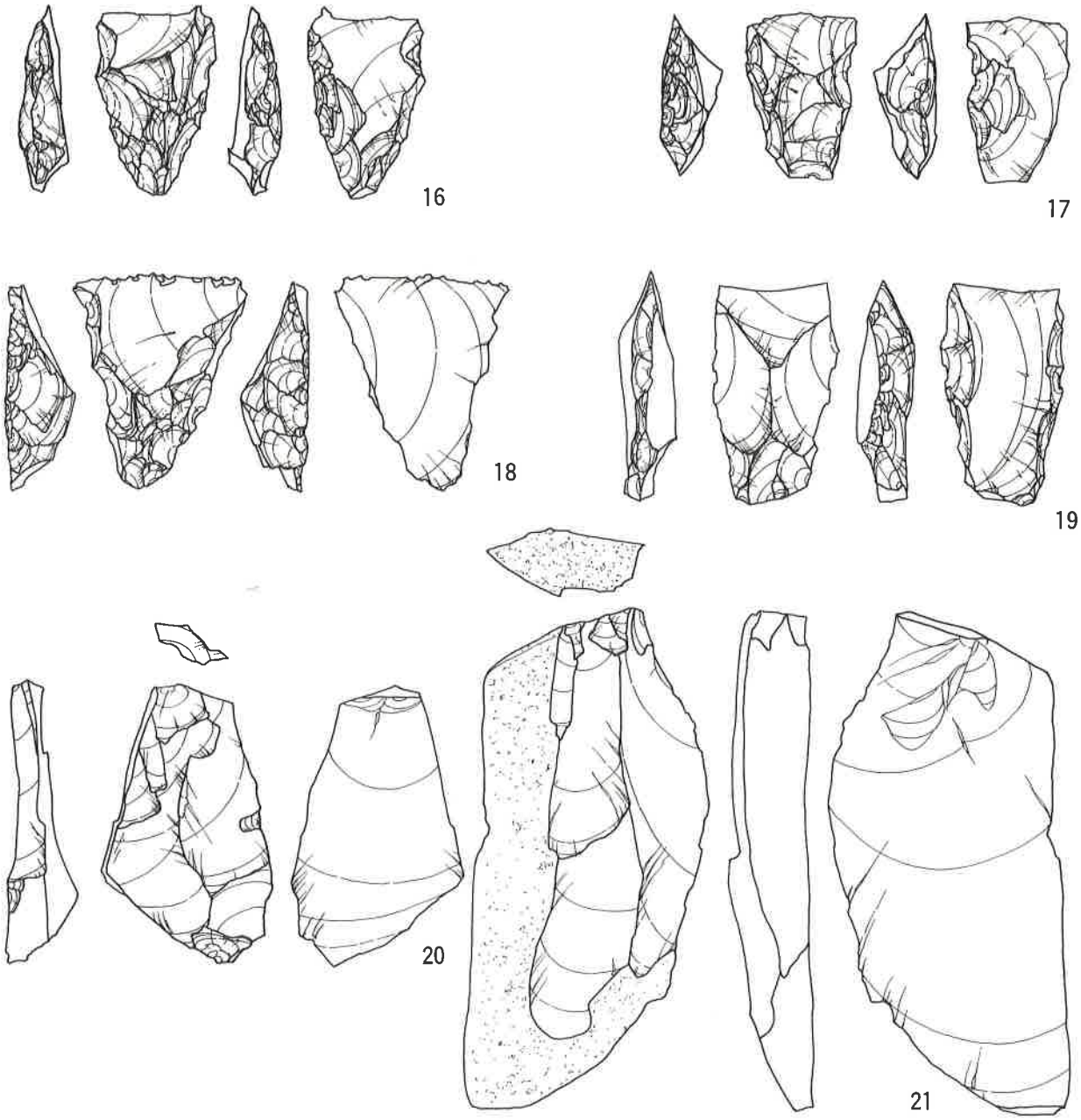
３類

13・14の２点の台形石器である。背面と主要剥離面の剥離方向が異なる不定形剥片を用い，なおかつ，それらの剥離面の交差部を刃部としている。13の刃潰し加工は両側縁と下面の３面におよび14は打面をそのまま下面としている。

No	器種・類	出土区	石質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	登録番号
1	台形石器１類	Ｂ－３	珪　岩	１・８	１・８	０・４	１・３	ＭＰ589
2	台形石器１類	Ｂ－３	珪　岩	１・４	２・８	０・４	１・３	ＭＰ571
3	台形石器１類	Ｂ－３	黒曜石	１・６	２・０	０・４	１・５	ＭＰ592
4	台形石器１類	Ｃ－３	黒曜石	２・０	１・７	０・６	１・８	ＭＰ144
5	台形石器１類	Ｂ－３	黒曜石	２・０	１・９	０・５	２・１	ＭＰ339
6	台形石器１類	Ｃ－３	黒曜石	２・０	２・０	０・６	１・３	ＭＰ146
7	分割剥片	Ｃ－３	黒曜石	１・９	１・４	０・３	１・２	ＭＰ192
8	台形石器２類	Ｃ－３	黒曜石	１・５	１・８	０・６	１・７	ＭＰ401
9	台形石器２類	Ｂ－３	黒曜石	２・５	１・７	０・８	２・６	ＭＰ614
10	台形石器２類	Ｃ－３	黒曜石	２・４	１・８	０・８	２・６	ＭＰ419
11	台形石器２類	Ｃ－３	黒曜石	２・０	１・８	０・６	１・９	ＭＰ463
12	台形石器２類	Ｂ－３	黒曜石	２・４	１・８	０・８	３・３	ＭＰ16
13	台形石器３類	Ｃ－３	珪　岩	２・０	２・２	０・６	２・４	ＭＰ509
14	台形石器３類	Ｂ－２	黒曜石	１・６	１・６	０・４	０・９	ＭＰ835
15	台形石器２類	Ｃ－３	黒曜石	２・２	１・９	０・７	２・６	ＭＰ156
16	台形石器４類	Ｃ－３	珪　岩	３・０	１・９	０・８	３・８	ＭＰ145
17	台形石器４類	Ｃ－３	黒曜石	２・５	１・６	１・０	３・４	ＭＰ483
18	台形石器４類	Ｃ－３	珪　岩	３・２	２・６	１・０	６・１	ＭＰ490
19	台形石器４類	Ｂ－３	鉄石英	３・３	１・９	０・８	５・７	ＭＰ53
20	使用痕剥片	Ｃ－３	瑠　璃	４・３	２・６	１・１	６・８	ＭＰ205
21	剥　　片	Ｂ－３	砂　岩	７・４	３・４	１・１	32・８	ＭＰ11
22	角錐状石器	Ｂ－３	鉄石英	４・２	１・８	１・２	７・９	ＭＰ174
23	剥片尖頭器	Ｂ－４	軟シ頁岩	６・５	２・９	１・９	26・９	ＭＰ686
24	剥片尖頭器	Ｂ－３	頁　岩				５・８	ＭＰ377
25	剥片尖頭器	Ｂ－２	頁　岩	８・１	３・３	１・４	29・６	ＭＰ391
26	使用痕剥片	Ｂ－３	黒曜石	３・３	１・４	０・７	２・３	ＭＰ166



第７図　旧石器時代１（１／１）



第８図　旧石器時代２（１／１）

４類

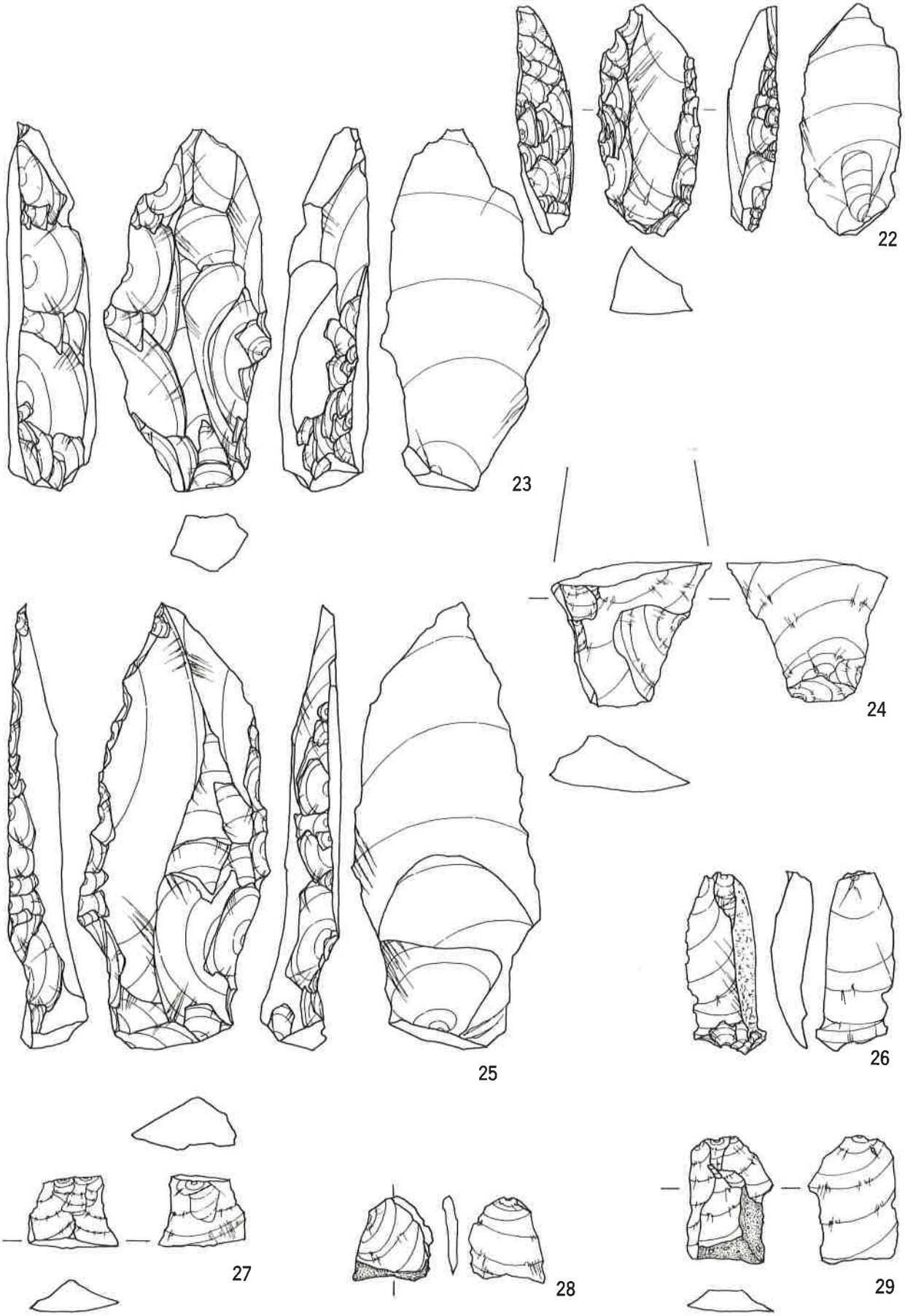
16・17・18・19の４点の台形石器である。いずれも刃部を長さが凌駕しているものを一括して取り扱っている。また，素材剥片は共通して厚手の不定形剥片を用いている。16の側縁調整は背面・主要剥離面の両面におよび，基部整形を思わせる。18の測縁調整は全て主要剥離面方向から行い，ここでも基部整形を連想される。

２　角錐状石器

22の１点で頭部の一部が欠落している。背面と主要剥離面の剥離方向は90度転移し，側縁調整は両側縁ともに，主要剥離面から急峻に行っている。

３　剥片尖頭器

23・24・25の３点で，24は基部のみ，23・25の打面はともに平坦面である。23の基部の造り出しは明瞭でないが，右側縁部の重複する調整剥離が認められる。25では両側縁に大剥離を行うことで，基部を造り出している。



第９図　旧石器時代３（１／１）

4　分割剝片

7・27・62の3点で，下端部は欠落する。台形石器1類の素材と言える。

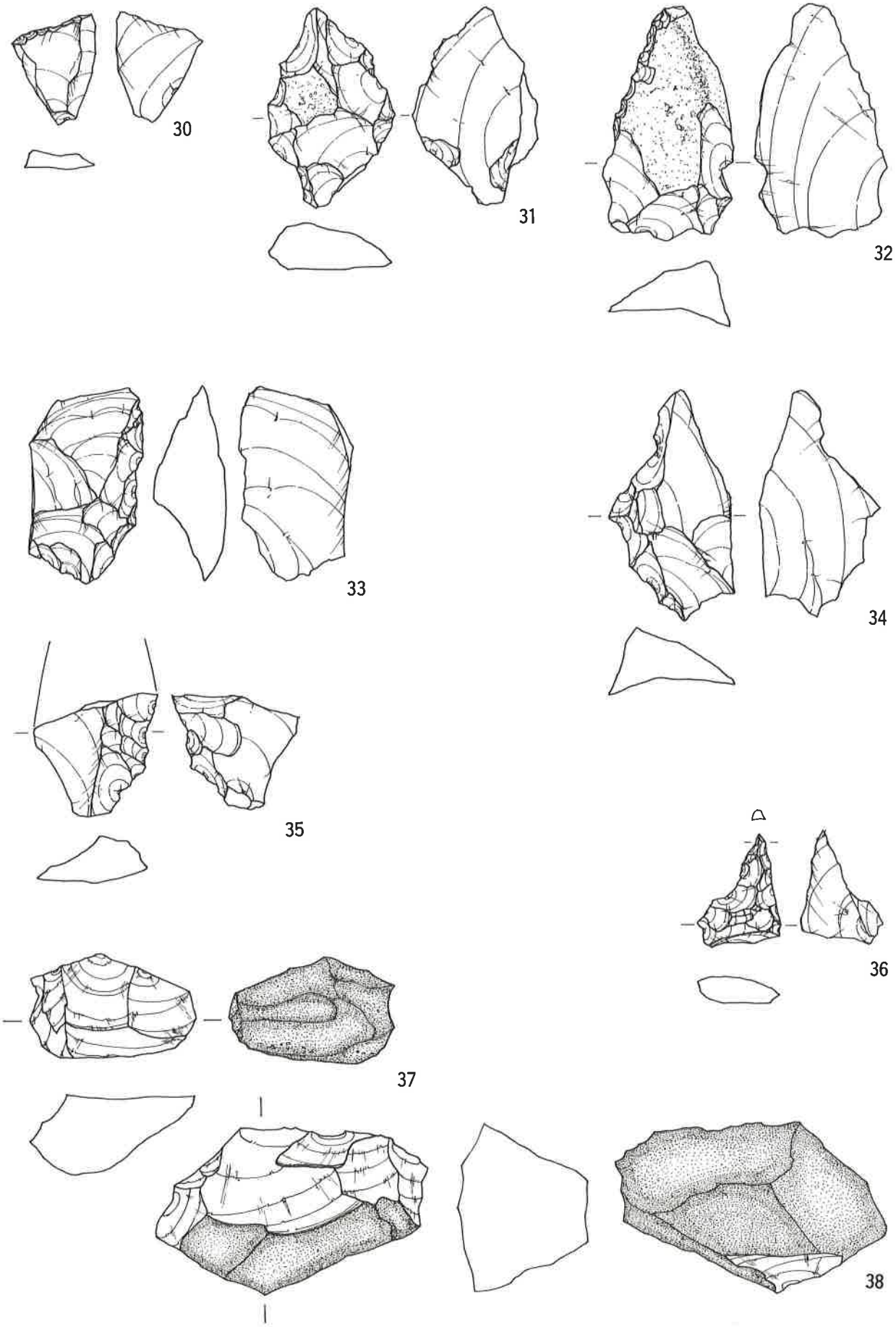
5　ナイフ形石器

30・31・32・33・34・35・36・52の8点をナイフ形石器と捉えている。黒曜石を用いた中で，30は県外産・36は鹿児島市三船産，その他は近接する樋脇町上牛鼻産である。

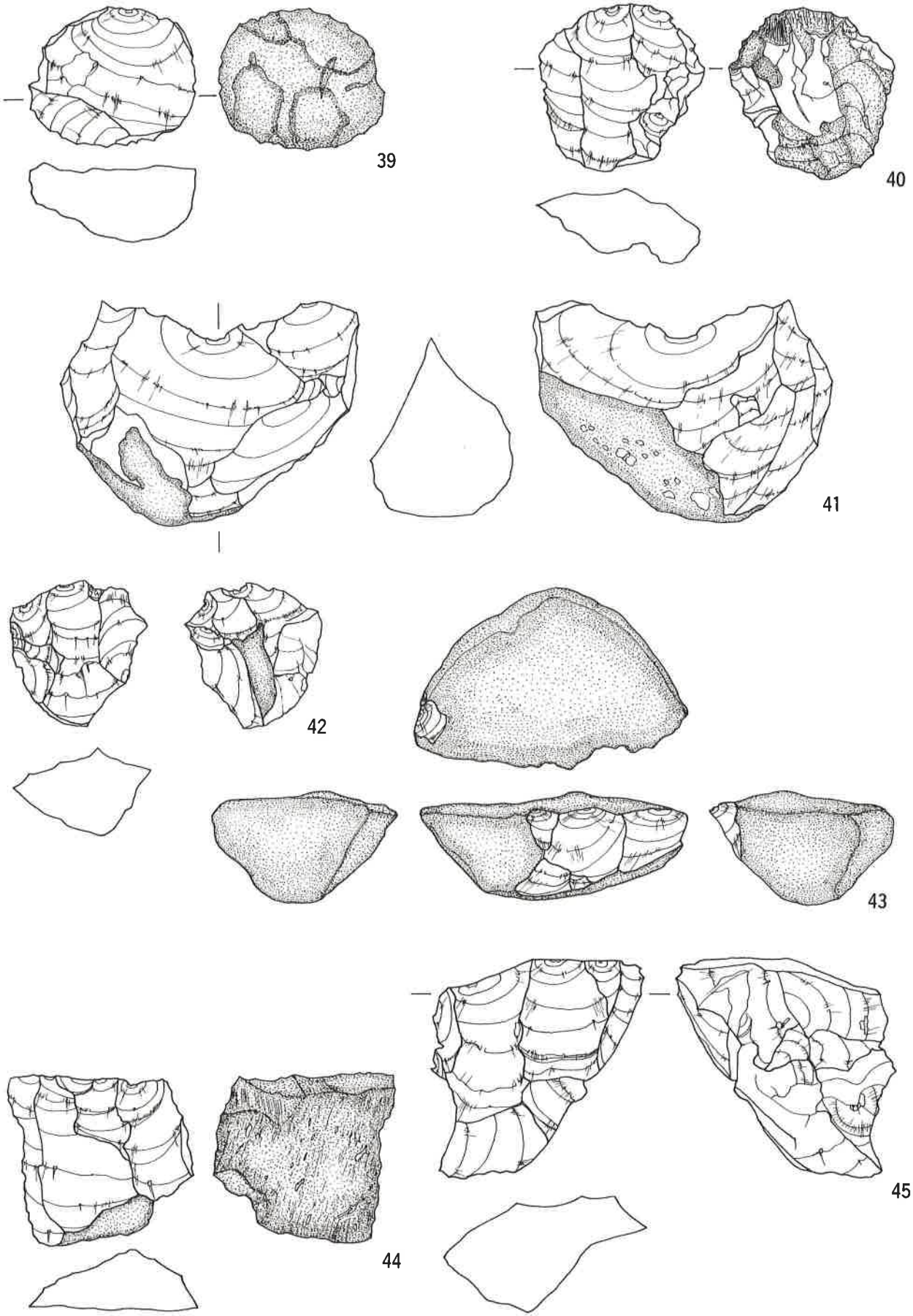
30は薄手の偏平な剝形の一辺に主要剝離面から刃潰し加工を施している。31・32・33・34・35のナイフ形石器はいずれも稜の高い不定形剝片を素材としている。なお，背面に残される剝離面からこれらが求心的に剝出されていることが理解できる。また，これらのナイフ形石器に特徴的な調整加工は，急角度の刃潰し加工である。この加工は，基本的に主要剝離面の裏面側から背面に施されている。

No	器種・類	出土区	石質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	登録番号
27	分割剝片	B－3	黒曜石	1・3	1・6	0・6	1・0	MP601
28	剝片	B－3	黒曜石	1・4	1・3	0・2	0・4	MP85
29	剝片	C－3	黒曜石	2・2	1・6	0・4	1・2	MP149
30	ナイフ形石器	B－3	黒曜石	2・0	1・5	0・4	0・9	MP747
31	ナイフ形石器	A－2	黒曜石	3・7	2・3	1・1	6・5	MP230
32	ナイフ形石器	A－3	黒曜石	4・2	2・3	1・3	11・5	MP362
33	ナイフ形石器	A－2	黒曜石	3・4	2・1	1・3	9・3	MP
34	ナイフ形石器	A－4	頁岩	4・2	2・2	1・3	8・1	MP378
35	ナイフ形石器	B－3	黒曜石	2・1	2・1	1・1	3・5	MP757
36	ナイフ形石器	A－3	黒曜石	2・0	1・5	0・6	1・1	MP289

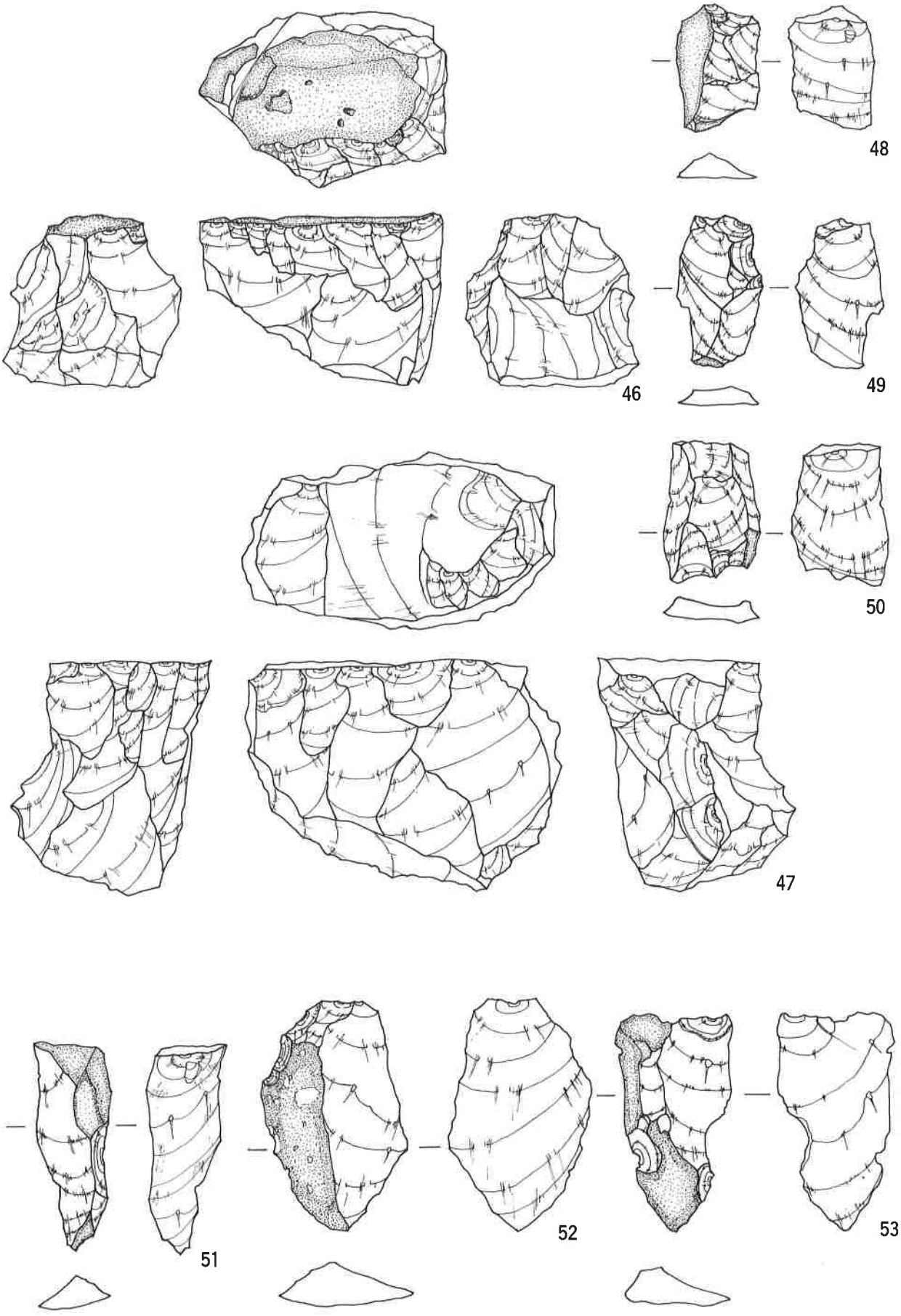
No	器種・類	出土区	石質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	登録番号	備考
37	石核	C－3	黒曜石	1・9	3・2	1・6	7・8	MP141	素材は角礫で，打面は礫皮面。横長の不定形剝片を剝出。
38	石核	C－3	珪岩	2・9	5・1	2・3	35・9	MP484	素材は角礫で，打面は礫皮面。横長の不定形剝片を剝出。
39	石核	B－2	黒曜石	2・5	3・0	1・3	11・0	MP567	素材は円礫で，礫打面に沿って不定形剝片を剝出。打面転移。
40	石核	A－4	黒曜石	3・0	3・0	1・1	9・6	MP254	素材は円礫で，礫打面に沿って不定形剝片を剝出。
41	石核	C－3	瑠璃質	3・7	5・5	2・6	52・6	MP440	稜線からの交互剝離。横長不定形剝片を剝出。
42	石核	B－3	黒曜石	2・7	2・6	1・6	7・6	MP609	小型の不定形剝片剝出。県外産良質。
43	石核	B－3	黒曜石	3・4	4・8	1・8	30・7	MP101	素材は角礫で，打面は礫表面。不定形剝片を剝出。
44	石核	C－3	黒曜石	2・9	3・0	1・3	10・7	MP559	素材は角礫で，打面は礫表面。不定形剝片を剝出。県外産良質。
45	石核	A－2	黒曜石	3・3	3・8	1・9	20・6	MP271	打面は分割面。打面調整無し。
46	石核		黒曜石	3・1	4・4	3・2	50・6	MP	打面は礫皮面。打面調整無し。
47	石核	B－3	黒曜石	4・1	5・5	3・3	81・6	MP2	打面は分割面。打面調整無し。縦長の不定形剝片を剝出。
48	剝片	B－3	黒曜石	2・3	1・5	0・6	1・7	MP336	県外産良質。
49	剝片	B－3	黒曜石	2・8	1・5	0・6	2・2	MP68	県外産良質。左側縁上部は分割。
50	剝片	B－3	黒曜石	2・6	1・8	0・5	2・1	MP752	打面は平坦面。上牛鼻産。
51	剝片	C－3	黒曜石	3・7	1・3	0・7	2・7	MP196	県外産良質。右側縁の剝離は先行する剝離面。
52	ナイフ形石器	B－3	黒曜石	4・1	2・5	1・0	7・7	MP345	県内産。左側縁上部の調整加工は刃潰し加工の可能性あり。



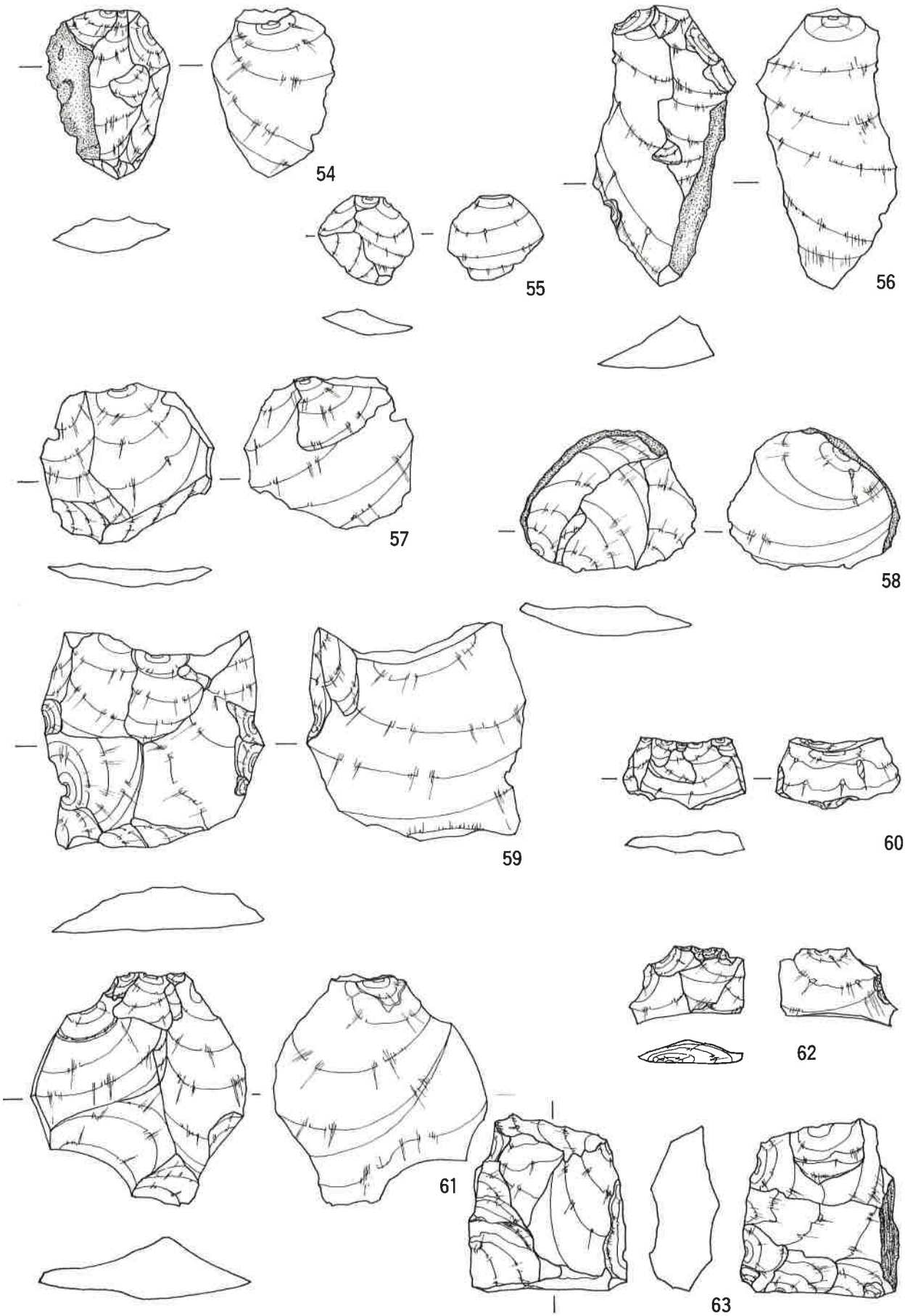
第10図　旧石器時代４（１／１）



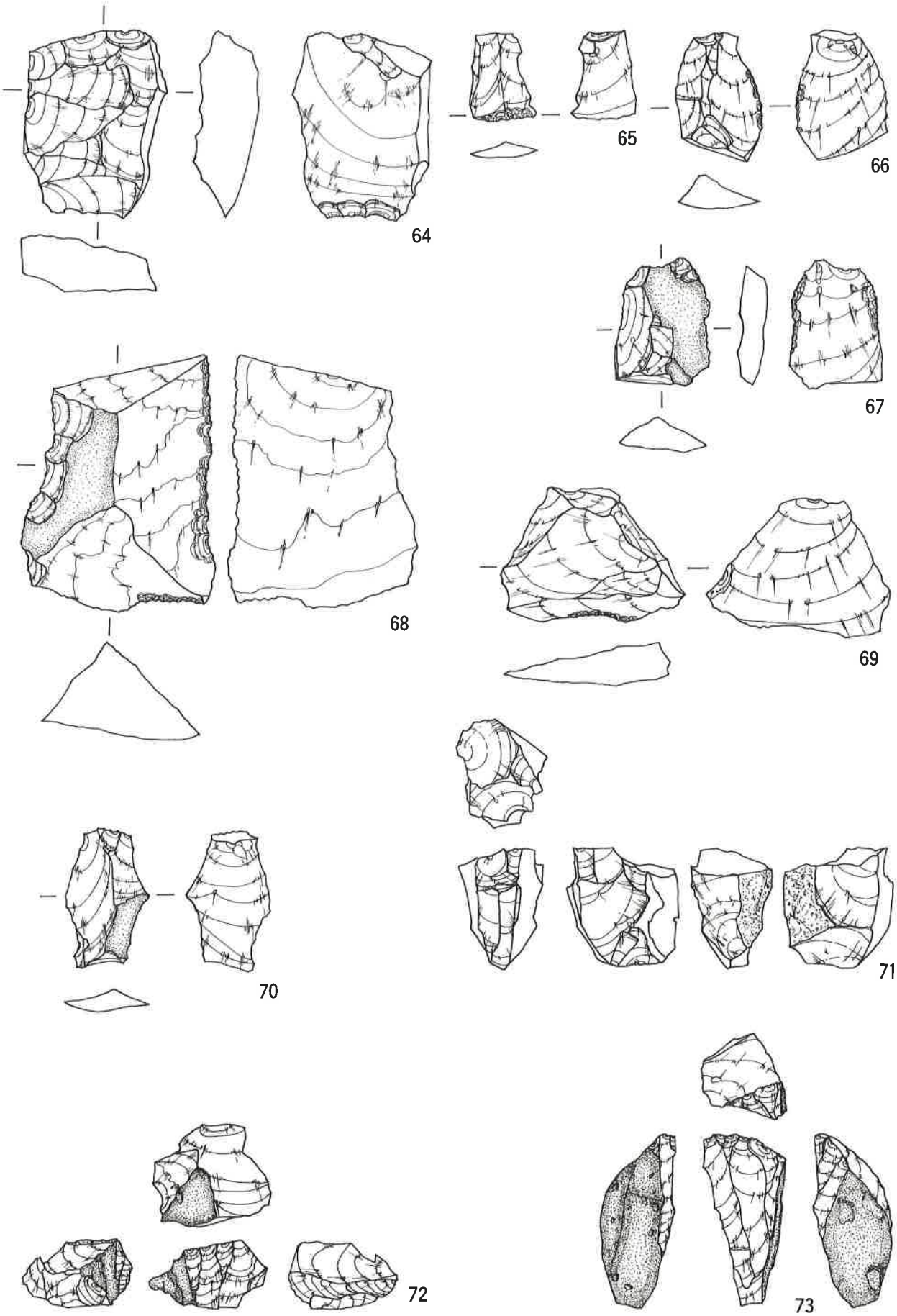
第11図　旧石器時代５（１／１）



第12図　旧石器時代６（１／１）



第13図　旧石器時代７（１／１）



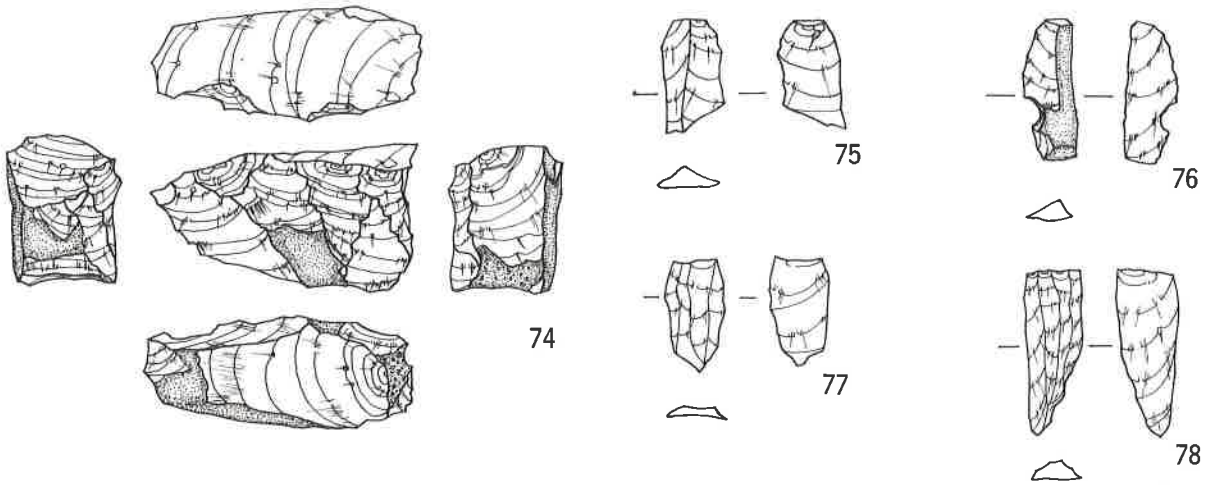
第14図　旧石器時代８（１／１）

No	器種・類	出土区	石質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	登録番号	備　　考
53	剝　　片	B－3	黒曜石	3・8	2・0	0・7	5・3	MP756	素材は角礫。上牛鼻産。
54	剝　　片	B－4	鉄石英	3・0	2・2	0・7	4・5	MP	背面の先行する剝離面と同一方向の剝離。
55	剝　　片	C－3	頁　岩	1・6	1・6	0・4	0・8	MP204	求心状に剝出。
56	剝　　片	A－4	珪　岩	5・0	2・1	1・0	9・5	MP	背面の先行する剝離面と同一方向の剝離
57	剝　　片	B－3	珪　岩	2・8	3・1	0・4	3・6	MP	求心状に剝出。横長不定形剝片。
58	剝　　片	B－3	黒曜石	2・4	3・1	0・8	5・3	MP329	小型の不定形剝片。上牛鼻産。
59	剝　　片	A－3	フリント	4・0	4・0	1・0	14・7	MP792	分割剝片。
60	調整剝片	B－3	黒曜石	1・3	2・3	0・6	1・4	MP48	作業面調整。県内産。
61	剝　　片	B－3	頁　岩	4・1	3・9	1・4	17・1	MP25	求心状に剝出。
62	分割剝片	B－3	黒曜石	1・3	1・9	0・6	1・2	MP310	県外産良質。下端部欠落。
63	楔形石器	B－4	頁　岩	3・2	2・8	1・2	11・6	MP668	
64	楔形石器	B－3	瑪瑙質	3・2	2・6	1・2	13・4	MP646	
65	使用痕剝片	B－3	黒曜石	1・6	1・2	0・4	0・6	MP100	県外産良質。下端部に刃こぼれ。
66	使用痕剝片	C－3	黒曜石	2・3	1・6	0・7	2・0	MP154	県外産良質。右側縁部に刃こぼれ。
67	使用痕剝片	A－3	黒曜石	2・3	1・7	0・6	2・3	MP	県外産良質。 両側縁部に刃こぼれ。分割。
68	使用痕剝片	C－3	珪　岩	4・5	3・5	1・8	26・3	MP471	両側縁に刃こぼれ。
69	使用痕剝片	C－3	珪　岩	2・4	2・9	0・8	5・0	MP492	下端部に刃こぼれ。
70	剝　　片	B－3	珪　岩	2・4	1・6	0・5	1・5	MP72	
71	細　石　核	B－3	黒曜石	2・2	2・1	2・0	6・6	MP603	両側縁の剝離は下縁調整の可能性あり。
72	細　石　核	C－3	黒曜石	1・3	1・2	1・1	4・3	MP191	県外産良質。作業行程の最終段階と判断。
73	細　石　核	A－3	黒曜石	3・2	1・6	1・5	5・9	MP364	県外産良質。打面は加撃による平坦面。角礫使用。
74	ブランク	B－3	黒曜石	1・9	3・4	1・5	12・1	MP	県外産良質。右側縁は礫面，左側縁は打面からの整形剝離。
75	細　石　刃	C－3	黒曜石	1・5	0・8	0・5	0・3	MP532	端部欠落
76	細　石　刃	B－3	黒曜石	1・9	0・7	0・3	0・3	MP730	県外産良質。
77	細　石　刃	B－3	黒曜石	1・5	0・8	0・2	0・2	MP674	県外産良質。頭部欠落。
78	細　石　刃	B－3	黒曜石	2・2	0・8	0・3	0・5	MP805	県外産良質。頭部欠落。

6　石核および剝片

11点の石核が検出され，石材別には黒曜石９点と珪岩１点，瑪瑙質１点ある。なお，剝片尖頭器（軟質シルト質頁岩・頁岩）やその素材と考えられる21（砂岩）等に該当する石核は採取されていない。また，剝離面や石核の形状を観察する限り，大部分がいわゆる不定形剝片（幅広の剝片や幅広の縦長剝片）であり，縦長剝片や刃器の剝出は確認できない。

円礫や角礫を素材としたものが卓越し，37・38・39・40・44・46ではそれらの礫皮面をそのまま打面としている。したがって，51や53・67等の剝片がこれらの石核から取り出されたと考えられる。同じように，礫皮面を残す39と40の石核は，円礫を分割しその分割した礫面を打点としたと推定されるものである。特に，39の石核は丁度沢庵を切って行くような作業工程が復元され，58のような剝片が生産されたと推定される。



第15図　旧石器時代９（１／１）

43の石核は県外から運び込まれた良質の黒曜石で，搬入時の原石状態を残している。

41は瑪瑙質の円礫を素材とし，石核の稜線（剝片剝離の作業面）が両刃礫器状に残されるもので，交互に剝片剝離が進められている。

45と47は石核素材の分割面を打面としたもので，45は作業進行のほぼ最終段階と判断できる。47の打面は分割面をそのまま生かした単設打面である。

7　使用痕のある剝片

20は寸づまりの縦長剝片で，両側縁の中程に微細な剝離が残され，打面は単剝離面である。26は県外産の良質な黒曜石を用いた数少ない縦長剝片で，下端部に剝離が認められる。64も同様である。なお，26の打面は礫面がそのまま残されている。65は単剝離打面の剝片右側縁に微細な剝離を残している。67の先端部は分割されてているが，主要剝離面の両側縁にやはり微細な剝離が観察される。

68は稜の高い珪岩製の剝片を用いたもので，右側縁部と先端部に微細な剝離が集中している。また，左側縁部には大きめの剝離痕が残されるが，二次加工かどうかの判断はできない。69は横広剝片の先端部にやはり微細な剝離が認められる。

8　楔形石器

63と64の２点を楔形石器と判断している。63の整形剝離は素材剝片の縁辺部から，器体中央部にかけて行っている。64は単剝離打面の剝片剝離を残すやや厚手の剝片を素材とし，裏面は主要剝離面をそのまま生かし，表面は左側縁部に沿って整形剝離を行い整えている。裏面先端部の剝離痕は，使用によると判断した。

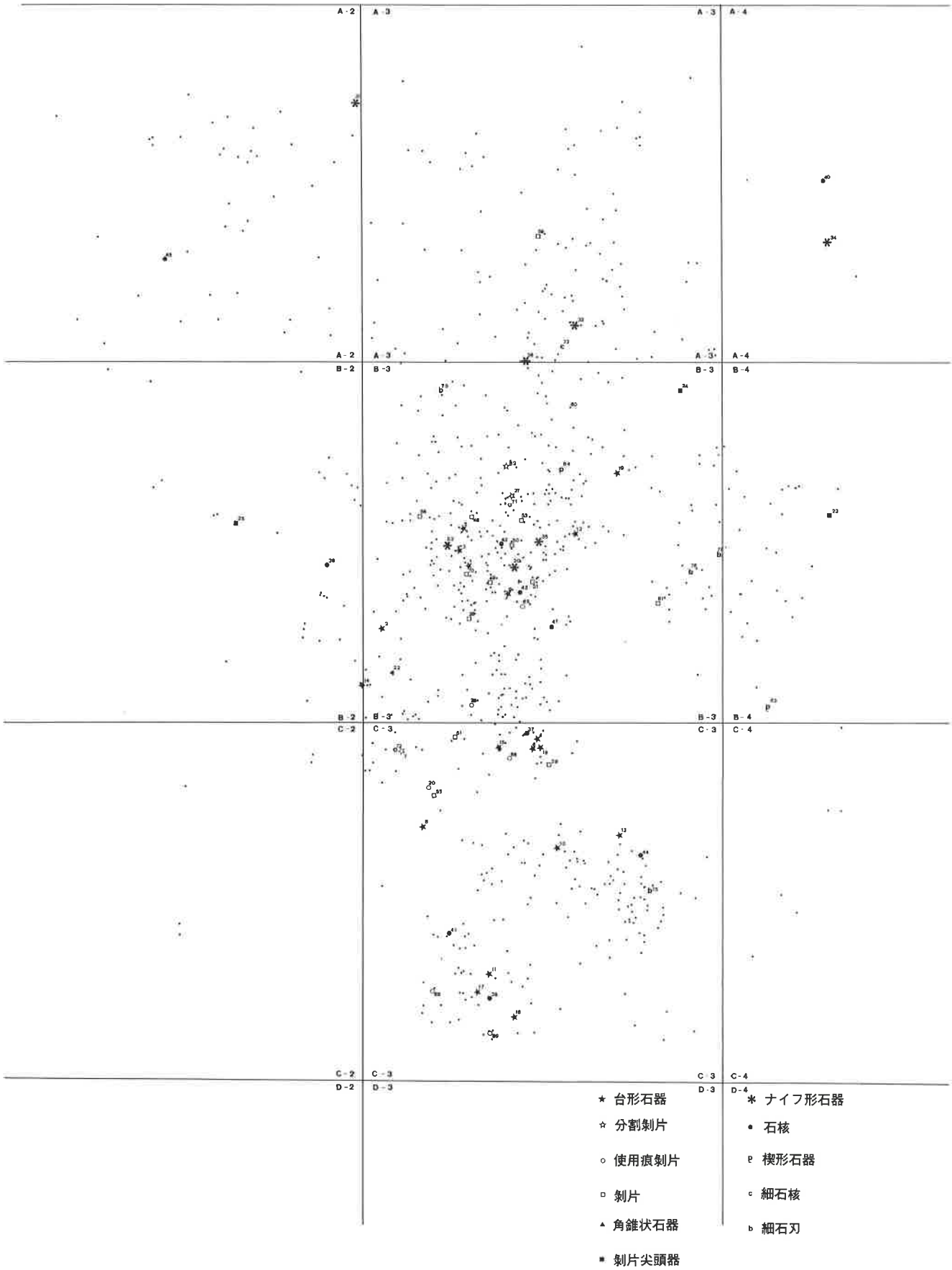
9　細石核および細石刃

71の左側縁から背部にかけては礫面が残されることから，例えば素材礫を分割したと想定される。また，両側縁部の下端部の剝離は下縁調整剝離の可能性が高い。72と73は県外産の良質の黒曜石を使用したもので，72の打面は礫面の平坦面をそのまま用いている。73は両側縁から背面は全て角礫の礫面がそのまま残され，打面は左側縁方向からの加撃による剝離面を生かしている。なお，この加撃の剝離は背面方向に大きく傾き，斜行打面を呈している。

４点の細石刃の内，75は先端部・77と78は頭部が除去されている。

10　ブランク

県外産の良質の黒曜石を使用したもので，右側縁部は礫面がそのまま生かされる。剥離工程を復元するとまず打面の作出が優先している。打面は礫分割段階で決定づけられ，分割面がそのまま打面に使用される。次に，作業面の造り出しは打面からの加撃で剥離を行い，その後，左側縁部の整形は打面からの繰り返しの剥離がなされ，最終段階で，下縁部が作業面方向からの１回の加撃で終了している。



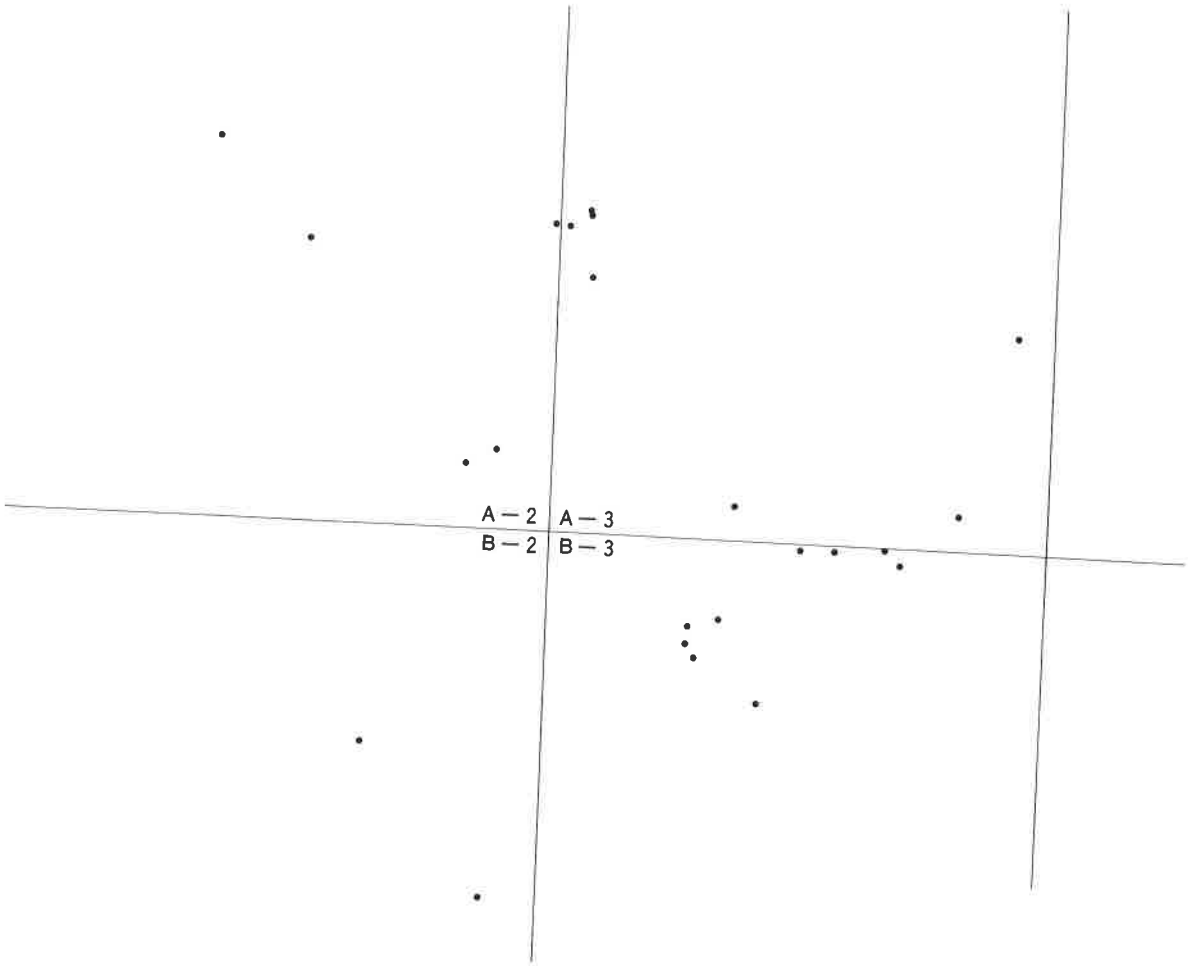
第16図　旧石器時代遺物分布・分類図（1／150）

第３節　縄文時代の調査の概要

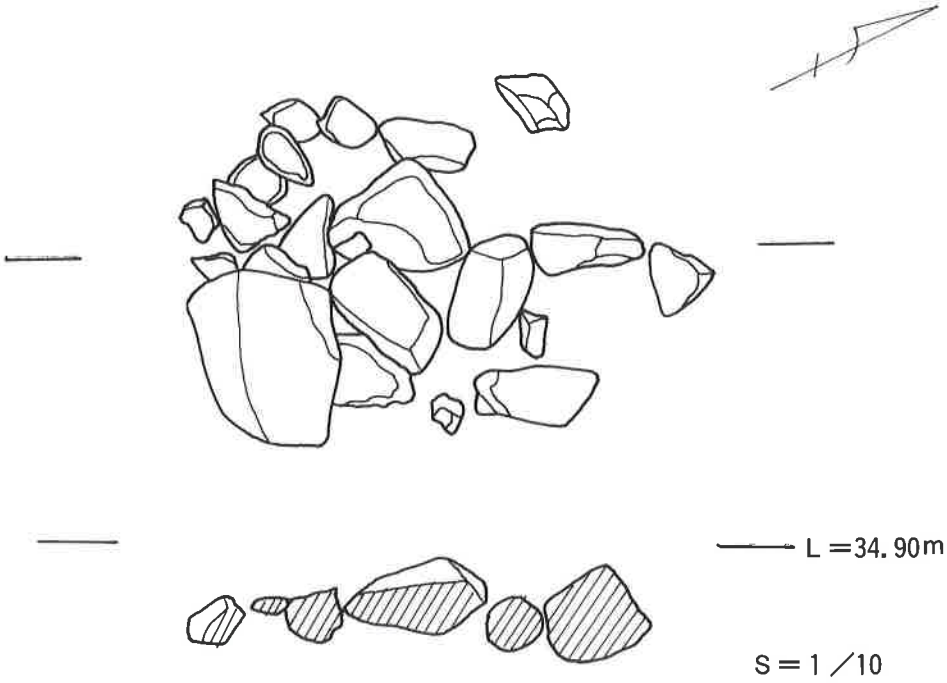
縄文時代の遺物は主に，Ⅱ層（アカホヤ火山灰腐食土）～Ⅲ層（肌色のソフトローム）中より出土した。分布はＡ・Ｂ－２・３区を中心に確認された。出土量は少ない。また縄文時代の遺構は，集石遺構１基が検出されている。

(1)　縄文時代の遺構

１トレンチのⅡ～Ⅲ層上面にかけて，集石遺構が１基検出された。集石は直径70cmの楕円形プランを呈し，約15cmから20cm位の石を５～６個を中心に，小礫が囲む。掘り込み等は確認出来なかった。



第17図　遺物出土状況



第18図　縄文時代早期集石遺構

1　縄文時代の出土遺物（第19図～第21図）

縄文時代の包含層はⅢ層（肌色ソフトローム）で，土器はＡＢ－２・３区を中心に，Ⅱ層（アカホヤ火山灰層）～Ⅲ層（肌色ソフトローム）中より出土している。石器はⅡ層～Ⅲ層中より，ＣＤ－４・８・９区を中心に出土している。

(1)　土器（第19図）

縄文時代早期の土器は，大きくⅠ類～Ⅳ類に類別される。Ⅰ類はいわゆる平底の貝殻文系円筒土器に該当し，Ⅱ類は格子状押型文土器に該当する。Ⅲ類は山形押型文土器に該当，Ⅳ類はその他の土器である。更に１類を口縁部付近に条痕を施すもの（Ia 類）・胴部付近に施文するもの（Ib 類）・全体に施文するもの（Ic 類）・大きく波形に条痕文を施し，胎土に金雲母を含むもの（Id 類）・器形は深鉢形で縦位の条痕を主とし，山形に２条の棒状の施文具で条痕を施すもの（Ie 類）の５つに細分した。

１）Ia 類土器（第19図－１～６）

口縁部は直上に直行し口唇部はやや丸味を帯びる。口縁部直下に太めの貝殻による条痕文を横位にやや波形に施す。土器の厚さは約１cm。

２）Ib 類土器（第19図－７）

胴部に細目の貝殻による条痕文を波形に施す。その際，部分的に押し引き状になる所も見受けられる。

３）Ic 類土器（第19図－８～12）

８～12まですべて胴部付近の破片である。条痕文は斜め・横と大まかに施文する。

4）Ib 類土器（第19図ー13）

胴部付近の破片である。大きく波形に条痕文を施し，胎土に金雲母を含む。

5）Ie 類土器（第19図ー15）

胴部のから底部にかけての破片である。器形は深鉢形で縦位の条痕を主とし，山形に２状の棒状の施文具で状痕を施す。

6）Ⅱ類土器（第19図ー16）

16は口縁部の破片である。口唇部はやや平坦に作られ，内側に一段の稜がつく。口縁部から胴部に至るまで，約５㎜の格子状の押型文が施文される。

7）Ⅲ類土器（第19図ー18～19）

胴部の破片で，外面に山形押型文を施す。

8）Ⅳ類土器（第19図ー14・17）

14は底部付近の破片で，外面に貝殻による状痕文を横位に施す。内面はヘラ状のもの及び貝殻で調整してある。17は底部片で外面に貝殻による状痕文が施され，内面も底面から立ち上がりにかけて貝殻による調整痕が残る。やや上げ底である。恐らく，桑ノ丸式土器系統の底部であろう。

(2) 石　器（20・21図）

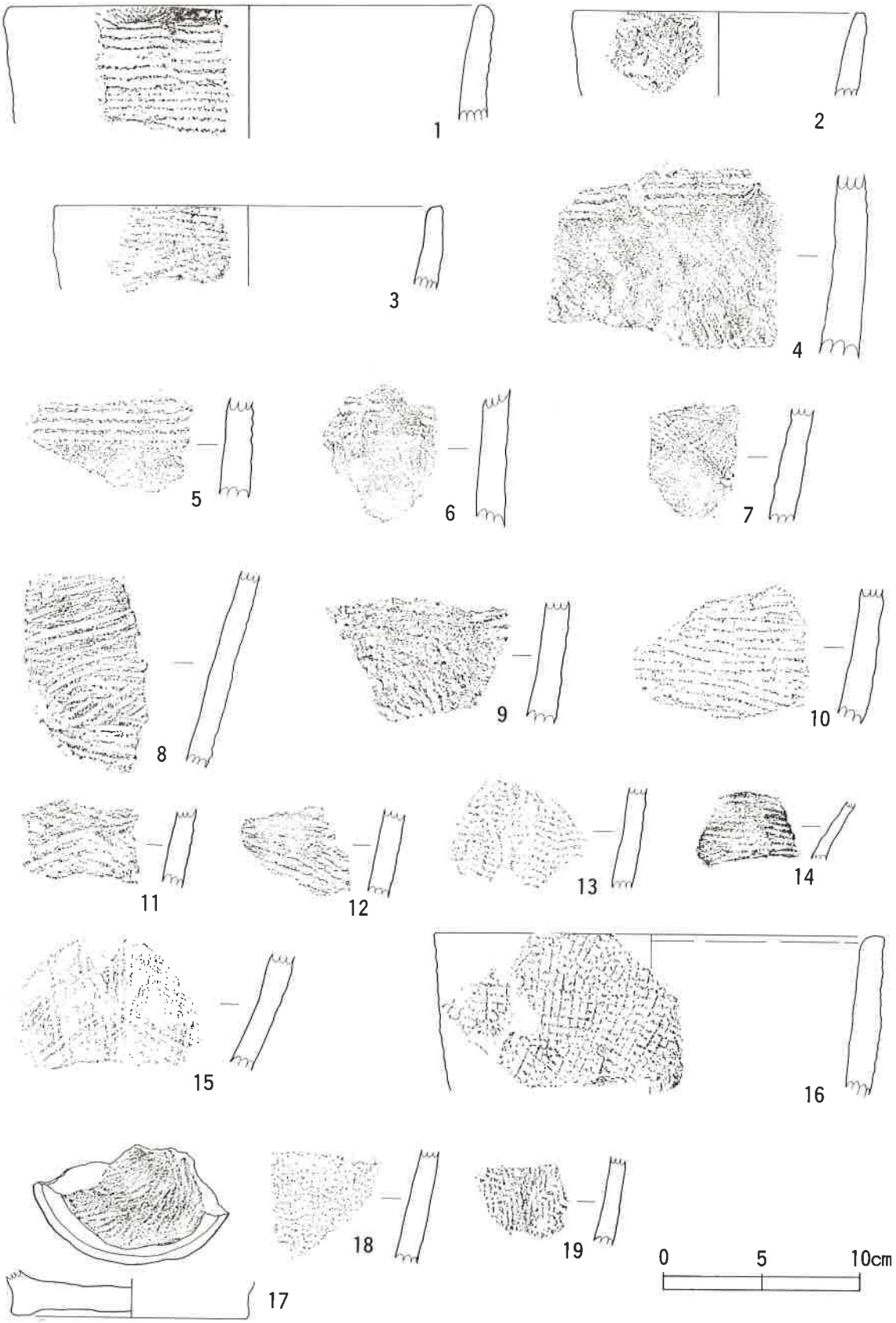
縄文時代の石器はＣＤ－４・８・９区を中心に出土し，Ⅱ・Ⅲ層に集中する。

石器の種類は石鏃・石斧・磨石・敲石・石皿等である。数量的には少ない。

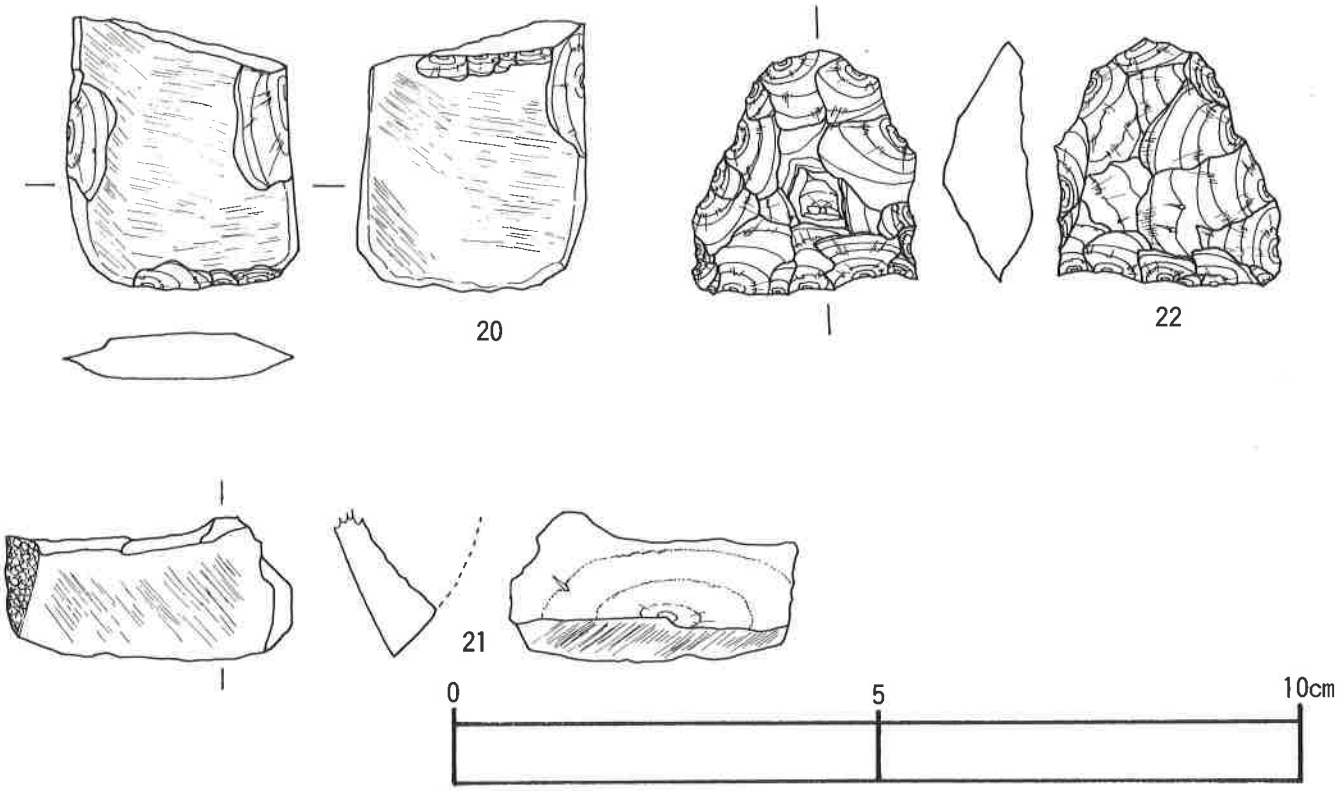
20～21は石斧である。石材は頁岩。20は基部を欠損している。両面とも側面より剝離を行い整形し，刃部から全体に研磨している。21も欠損品で，刃部部分を斜めからの打撃によって剝離したもの。刃部は両面とも良く研磨され，サイドは敲打の跡が見受けられる。22は頁岩製の石鏃である。基部は抉りが無く，先端も丸い，厚さ約１㎝あり，大型の石鏃である。23は敲石で１トレンチからの出土である。端部と石の中央に敲打の痕跡が見受けられ，特に中央部分は両面とも凹が出来ている。石材は砂岩である。24～26・28～30は磨石である。24は石材は角閃石安山岩で，表面と端部の一部に研磨痕が残る。端部は研磨により稜線が走る。25は石材は角閃石安山岩で，表面の一面に２ケ所の研磨痕が残る。接点には稜が走る。26は石材は角閃石安山岩で，表面の一面に２ケ所の研磨痕が残る。27は石材は角閃石安山岩で，表面に研磨痕及び敲打による凹が見受けられる。敲石と磨石との併用が伺える。28は磨石の破損品である。破損した部分も表面と同じ風化を示しているので，恐らく使用時期に破損し，廃棄されたものであろう。中央部分に一面だけ，研磨痕が残る。29・30は石材は角閃石安山岩で，風化が激しく敲打及び研磨痕は見られない。恐らく，磨石であろう。31は安山岩で石皿と思われる。両面とも使用による研磨痕が見受けられる。

第２表　出土土器観察表

遺物番号	出土区	層位	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
1	A－3	Ⅲ層	石英・角閃石・長石・礫	良好	赤茶褐色	条痕文	ナデ	口縁部
2	A－2	〃	〃　〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	〃
3	B－3	〃	〃　〃　〃　〃	良	淡茶褐色	〃	〃	〃
4	A－3	〃	〃　〃　〃　〃	良好	赤茶褐色	〃	〃	〃
5	〃	〃	〃　〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	〃
6	B－3	〃	〃　〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	〃
7	A－3	〃	〃　〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	胴部
8	B－3	〃	〃　〃　〃　〃	〃	黄茶褐色	〃	〃	〃
9	A－2	〃	〃　〃　〃　〃	良	赤茶褐色	〃	〃	〃
10	〃	〃	〃　〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	〃
11	A－3	〃	〃　〃　〃　〃	良好	黄茶褐色	〃	〃	〃
12	B－3		〃　〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	〃
13	A－2	〃	〃　〃　〃　〃金雲母	良	赤茶褐色	〃	〃	〃
14	A－3	〃	〃　〃　〃　〃	良好	黄茶褐色	〃	〃	底部
15	B－2	〃	〃　〃　〃　〃	〃	赤茶褐色	〃	〃	底部から胴部
16	B－3	〃	〃　〃　〃　〃	良	茶褐色	格子状押型文	〃	口縁部
17	A－2	〃	〃　〃　〃　〃	良好	赤茶褐色	条痕文	条痕文	底部
18	〃	〃	〃　〃　〃　〃	良	淡赤茶褐色	山形押型文	ナデ	胴部
19	B－2	〃	〃　〃　〃　〃	良好	赤茶褐色	山形押型文	〃	〃



第19図　縄文時代の出土遺物（土器）

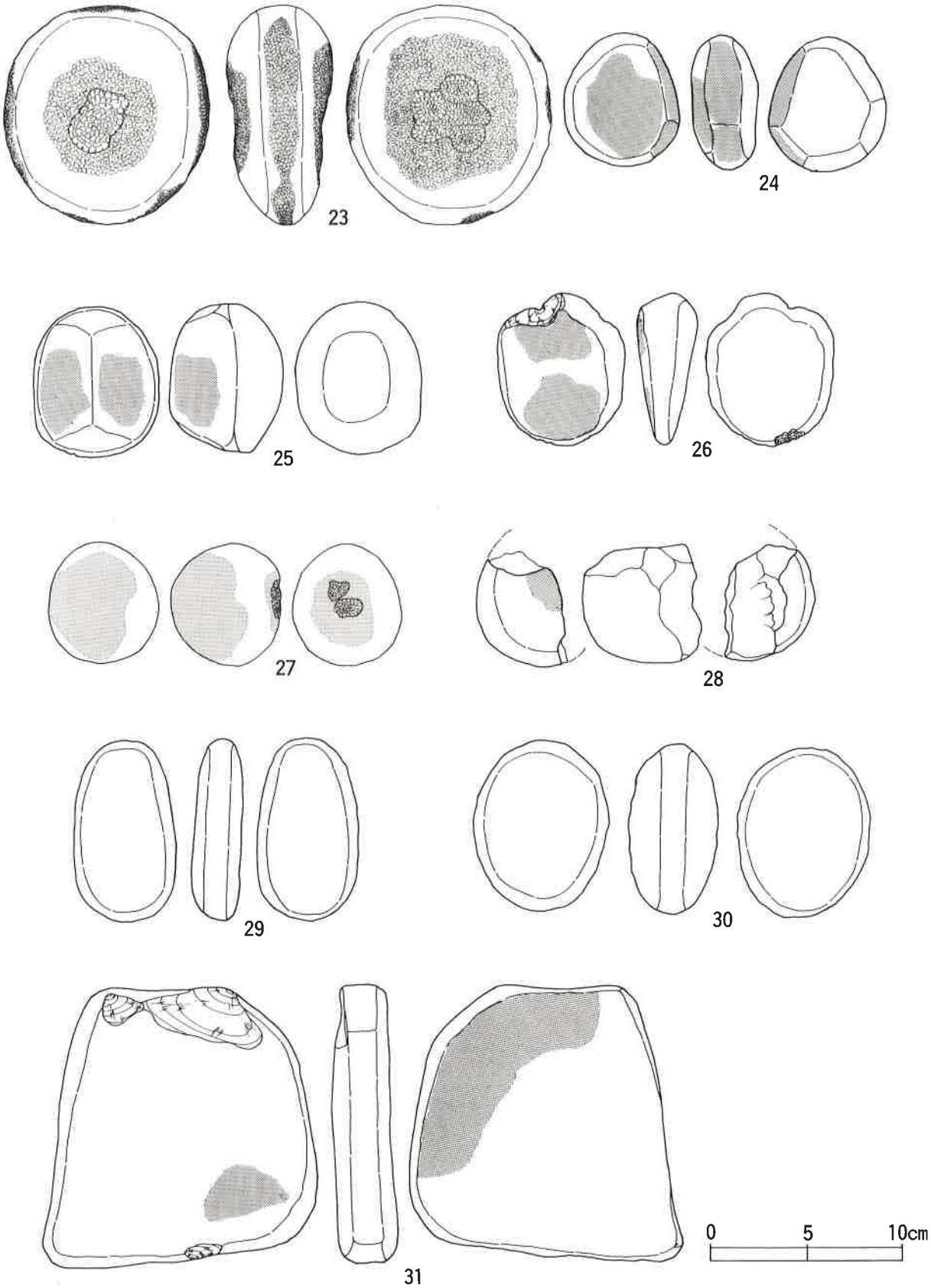


第20図　縄文時代の出土遺物（石器１）

第３表　出土石器観察表

（　）内は欠損品の最大値

遺物番号	器　種	出土区	層位	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
20	石斧	D－8・9	表層	頁岩	(3・2 cm)	(2・6 cm)	(0・5 cm)	10 g	欠損品
21	石斧	D－9	Ⅱ層	頁岩	(1・7 cm)	(0・8 cm)	(0・8 cm)	7・5 g	欠損品
22	石鏃		表層	頁岩	2・9 cm	2・6 cm	1 cm	9 g	
23	敲石	1トレンチ	Ⅱ層	砂岩	11・5 cm	10・8 cm	5・5 cm	995 g	
24	磨石	C－4	Ⅱ層	安山岩	7 cm	6 cm	3・4 cm	185 g	
25	磨石	C－4	Ⅱ層	安山岩	7・9 cm	6・6 cm	6 cm	405 g	
26	磨石	D－8・9	表層	安山岩	7・9 cm	6・7 cm	3・2 cm	185 g	
27	磨石＋敲石	C－6	Ⅱ層	安山岩	6・3 cm	5・7 cm	5・8 cm	295 g	
28	磨石	B－2	Ⅱ層	安山岩	(6・4 cm)	(4・5 cm)	(6 cm)	160 g	欠損品
29	磨石		表層	安山岩	9・5 cm	5・3 cm	2・6 cm	185 g	
30	磨石	C－4	Ⅱ層	安山岩	9 cm	7・1 cm	4・6 cm	285 g	
31	石皿	D－8	Ⅱ層	安山岩	14・7 cm	13・8 cm	3・2 cm	1300 g	



第21図　縄文時代の出土遺物（石器２）

第４節　古墳時代の調査

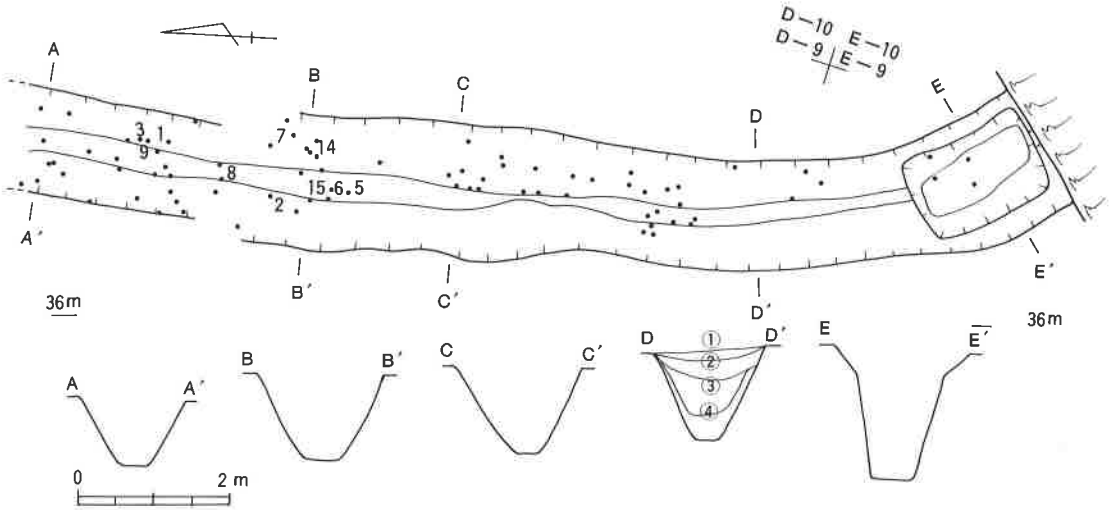
古墳時代の遺物は，赤ホヤの二次堆積土である赤茶褐色土中より出土しており，特に遺物の集中した部分が数ヶ所にみられた。検出された遺構は溝状遺構が１，土壙７，住居跡４であり，そのほとんどがⅢ層上面にての検出であった。

溝状遺構（第22図）

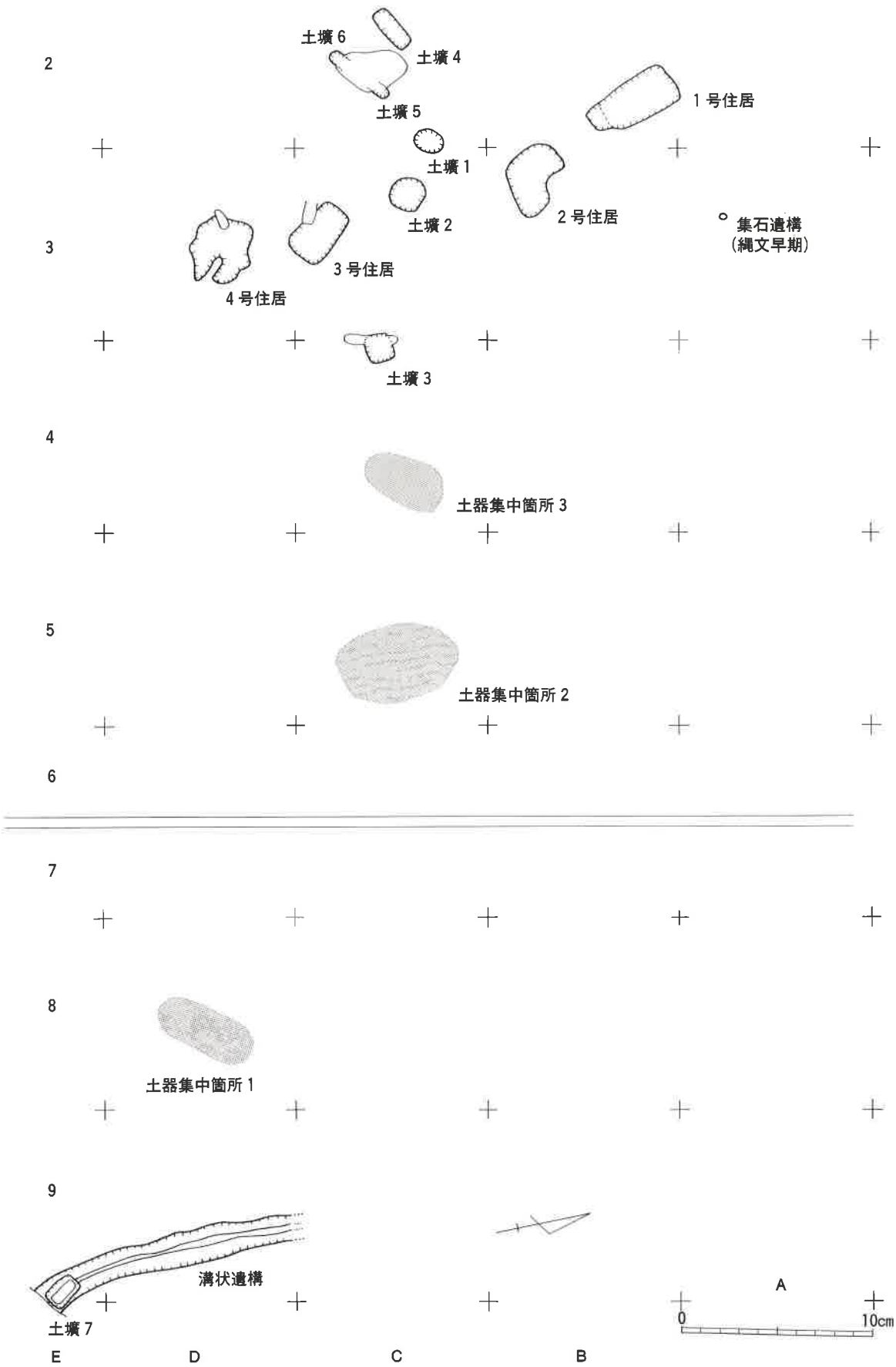
溝状遺構は調査区の北東端，Ｃ・Ｄ・Ｅ－９区より検出した。現存する規模は，長さ約25ｍ，幅約２ｍ，深さ約1.5ｍ～1.8ｍのｖ字状を呈するもので，地形にそって北へ緩く傾斜している。以前は，まだ南北に延びていたものと考えられるが，北側は一段低い畑であることから開墾による削平，南側は数メートル低い町道であることから道路建設により消失したのと思われる。また，溝状遺構南端部においては土壙７が溝を切るかたちで検出されている。

溝状遺構の埋土は基本的には，赤ホヤの二次堆積であるが，第22図のＤ・Ｄ′の部分で観察したところ４層にわたる堆積状況が観察された。以下はその堆積状況である。①赤ホヤの腐植土で暗橙色をし包含層よりやや暗い。②赤ホヤの腐植土にソフトロームを含むもので，色調は上層よりやや明るい。③赤ホヤの腐植土で暗橙色，微細の炭化物を多く含む。④赤ホヤの腐植土に橙色で径５ミリ以下程度の軽石を含む。

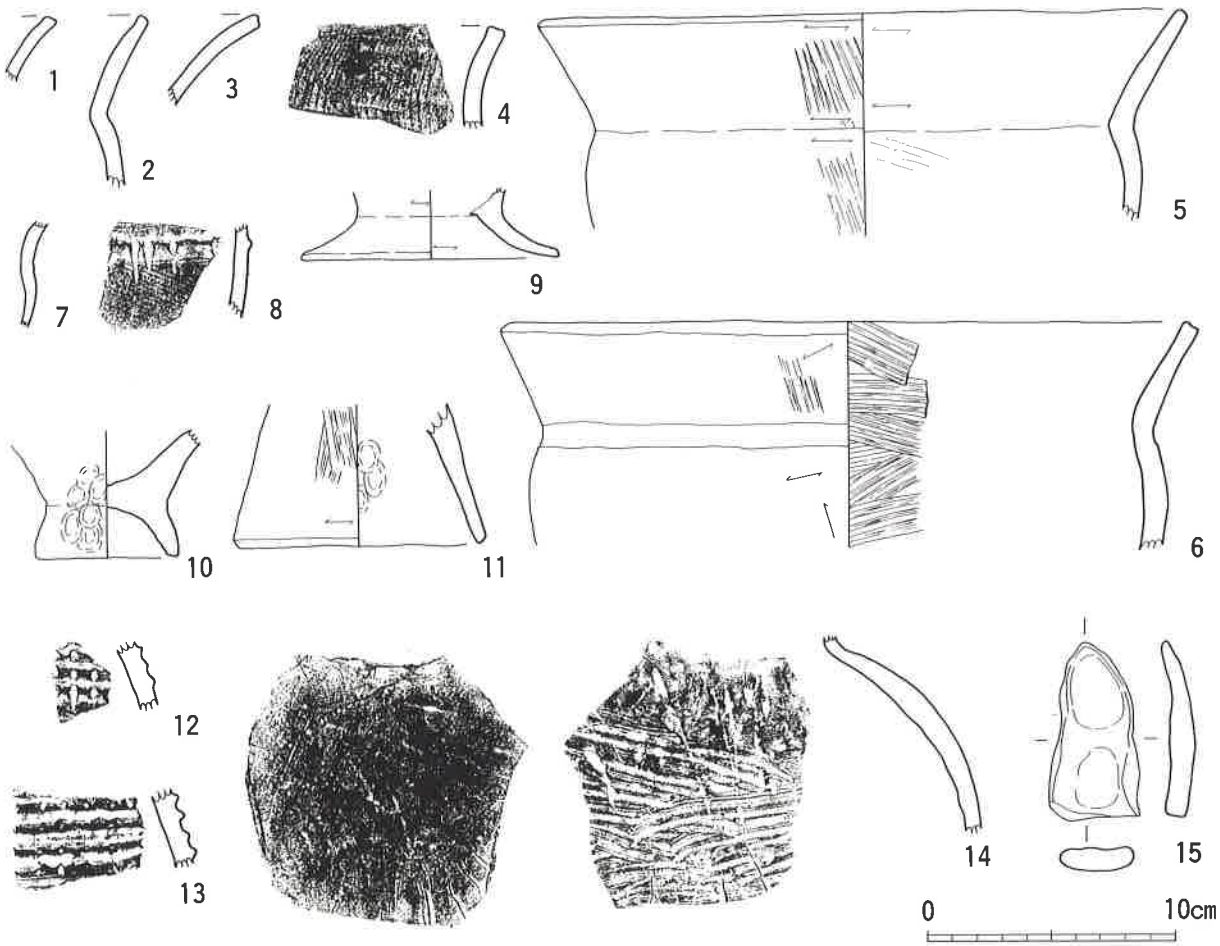
１～15は，溝状遺構中より出土した遺物である。１～６は，甕形土器の口縁部でいづれもくの字状に外反するものである。ただし，３についてはその傾きから壺形土器の可能性もある。７・８は頸部から胴部付近で，７はゆるやかに屈曲して口縁部へ至ると思われ，頸部外面にわずかにハケによる掻き上げの痕跡が観察される。８は断面が三角形の突帯に粗い刻みを施している。９～11は甕形土器の脚台部である。９の底部径は10・11に比較的大きいもののその高さは低く台付鉢状の器形となるものであろうか。10は低く内側に張る脚台で，内外面に指頭圧痕が多く観察される。11は真っ直ぐ立ち上がる脚台でその底部径から考えると大型の甕形土器になるものと考えられる。12～14は，壺形土器の胴部付近で，12，13は数条の断面が三角形の突帯に一回の施文で同時に縦の刻みを施すものである。14は胴部から頸部付近で，内面は比較的細いヘラによる調整，外面はヘラ削りによる調整の跡が観察されるものである。15は手捏ねによる土製品である。縦長の二等辺三角形状をし，やや湾曲するもので杓子状土器の柄の部分の可能性もある。



第22図　溝状遺構及び土壙７



第23図　古墳時代遺構配置図



第24図　溝状遺構出土遺物

土壙１（第25図）

土壙１は，Ｃ－２区の東端において検出されたもので，その規模は150×110㎝の楕円形で検出面からの深さは40㎝である。

16は甕形土器の頸部で，やや張る胴部からくの字状に外反して口縁部に至るものである。17は甕形土器の脚台部で外面にハケ目，内面に指頭圧痕が観察される。

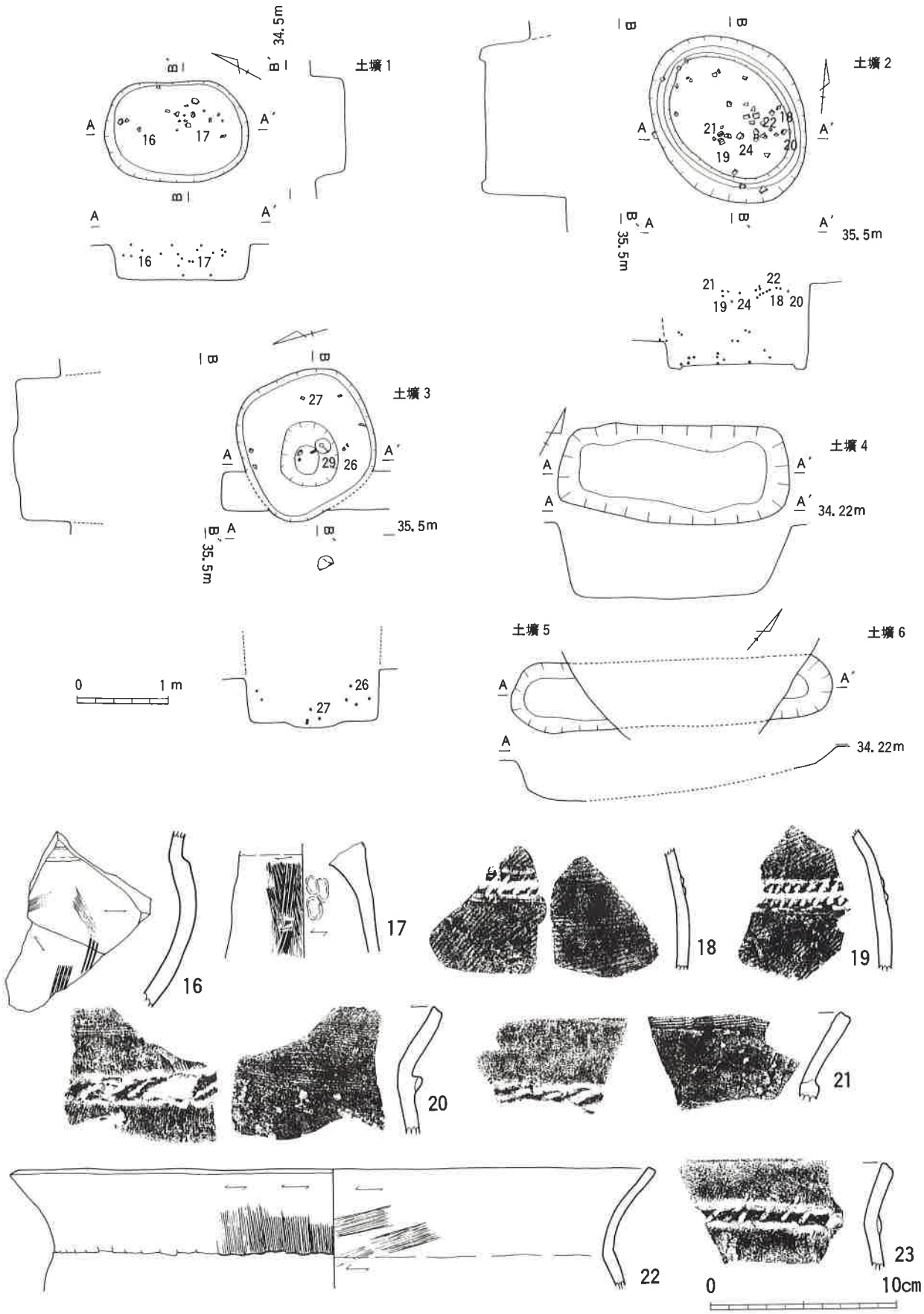
土壙２（第25図）

土壙２は，土壙１から南東へ約２ｍの地点，Ｃ－３区から検出されたもので，その規模は200×160㎝の楕円形で検出面からの深さは深いところで約90㎝である。また，底部の壁面に沿うようなかたちで幅約15㎝，深さ約10㎝のＵ字状の溝が検出された。

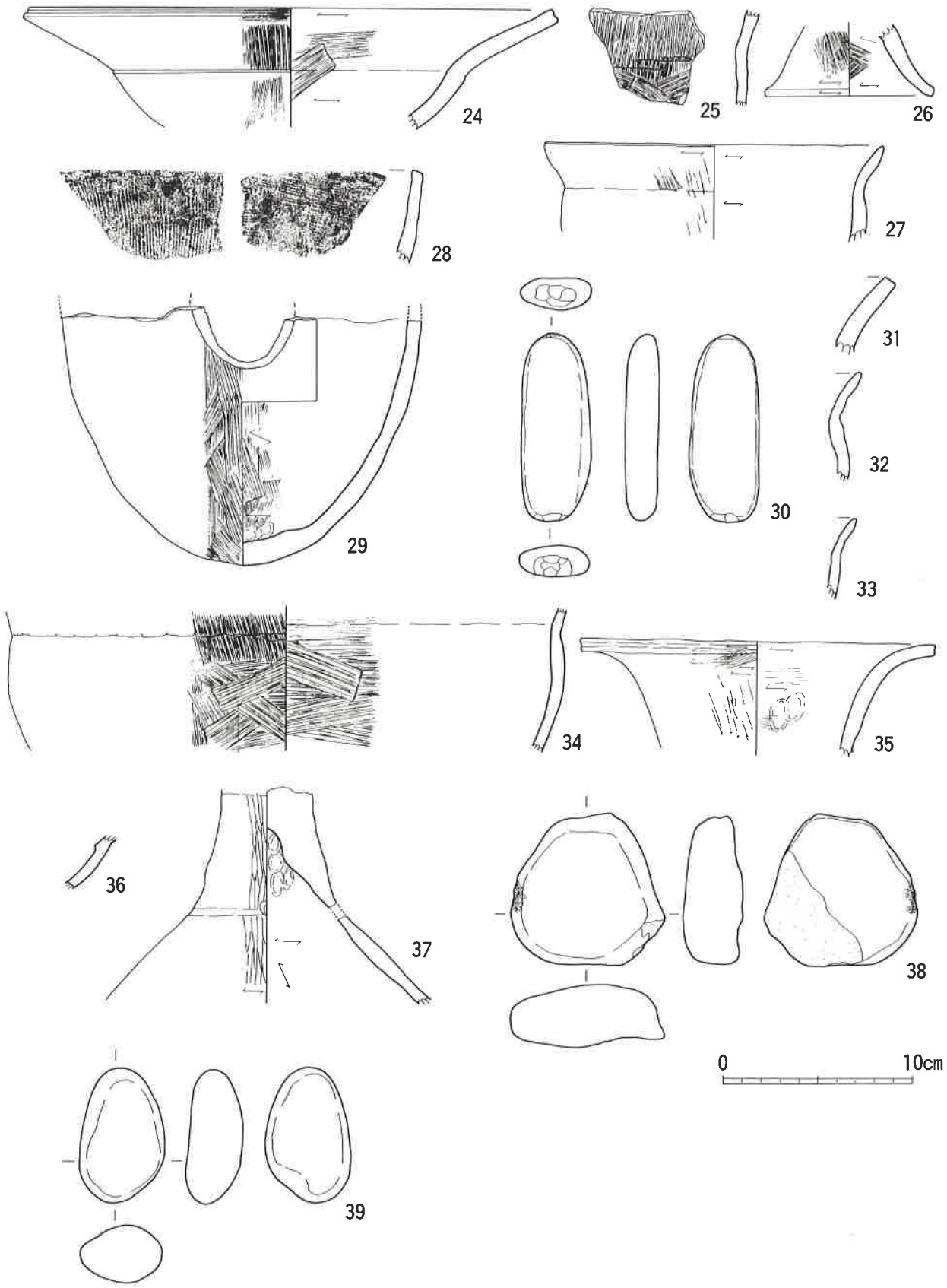
18・19は壺形土器の胴部付近で，低い二条の突帯に上下同時に刻みを施すものである。20・21・23は甕形土器の口縁部で，口縁はくの字状に外反し頸部に刻目突帯を施すものである。22は，復元口縁径約35㎝の甕形土器の口縁部で，他の甕形土器と同様に頸部でくの字状に外反し，やや内湾する口縁部へ至るものである。24は復元口縁径約28㎝の高坏の坏部で，底部からの口縁への立ち上がりに段を有し，大きく開いて口縁部へ至るものである。

土壙３（第25図）

土壙３は土壙２から南東に約７ｍの地点，Ｃ－４区から検出されたもので，その規模は140×150㎝の



第25図　土壙1～6及び土壙内出土遺物



第26図　土壙内出土遺物

隅丸方形で検出面からの深さは約50cmである。また，底面中央部に70×60cmの浅い皿状の窪みを持つものである。この土壌の検出面から約110cm上方のⅢａ層より穿孔された壺形土器が出土し，埋土中には，赤ホヤの腐植土の他に焼土や炭化物などが多量に混入していた。

25は甕形土器の頸部，26は客部である。28は鉢形土器の口縁部と思われ，内外面にハケによる調整が観察される。29は，土壙の検出面よりも上方で出土したものであるが，その周辺のⅢａ層からは包含層としての遺物の出土がないことから本来の土壙はかなり深く，29は土壙に関係するものと考えられるものである。30は土壙の中央部の窪み部分から出土したもので，最大長10cm，最大幅3.5cmの石製品であり，図の上下端にわずかな敲打痕と煤の付着が観察される。

土壙４（第25図）

土壙４は，調査区の西端Ｃ－２区から検出されたもので，その規模は250～110cmの方形で検出面からの深さは80cmである。遺物の出土は見られなかった。

土壙５・６（第25図）

土壙５・６は土壙４の東側50cmのところで検出されたものである，この二つの土壙は，本来は長軸が約350cmの長楕円状を呈し，その底面は土壙５側へ傾斜する一つの土壙が，後世の攪乱により中央部を破壊されたものと考えられる。遺物の出土はみられなかった。

土壙７（第22図）

土壙７は，調査区の東端の溝状遺構と切り合い関係で検出されたもので，切り合いから判断すると土壙が溝状遺構よりも新しいものと思われ，その規模は180×120cmの方形を呈し，深さ130cmである。土壙内からは，31・34のような外反する甕形土器，32・33のように比較的小型で指圧痕やヘラ傷の残る甕形土器あるいは鉢形土器の口縁部，大きく外反する壺形土器の口縁部及び円形の透しを４ヶ所有すると思われる高坏の脚部と比較的丸い礫が２個（38・39）が出土したが，切り合い関係であることから溝状遺構内の遺物である可能性もある。

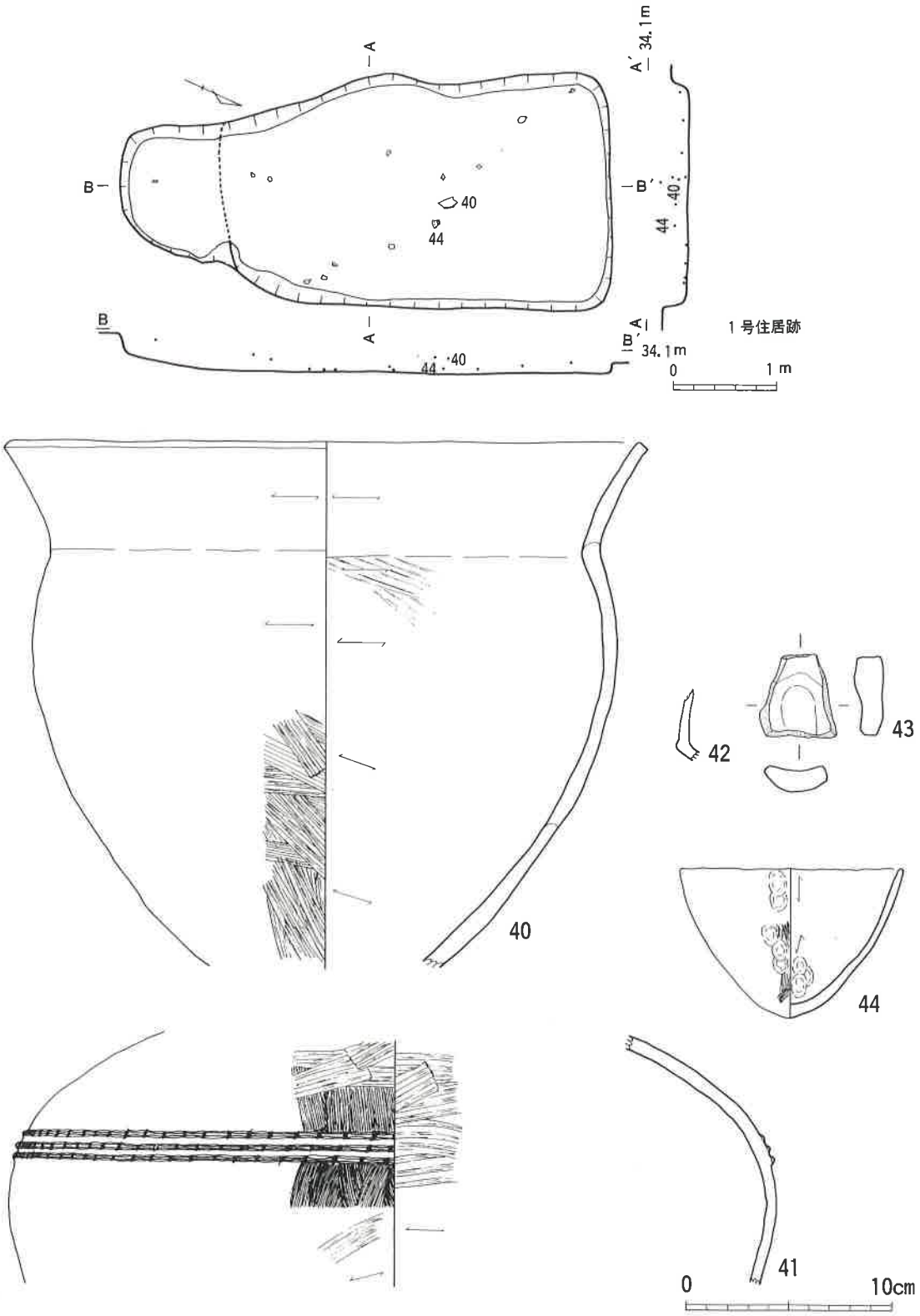
住居跡

住居跡は調査区の西端から南北に並ぶように４基が検出された。著しい攪乱を受けているものや削平により床面のみしか残存していないものもあり，その正確なプランを確認し得たのは４号住居のみであった。

１号住居（第27図）

１号住居は，Ｂ－２区から検出されたもので，４基の住居跡の中では最北端に位置するものである。検出時には，長軸450cmの台形状のプランのようであったが，精査の結果，北側３分の２程度の床面が堅く踏みしめられて硬化し，南側では埋土に乱れがあることや遺物の出土量が少ないことから，本来の住居跡は破線より北側の部分であると考えられる。

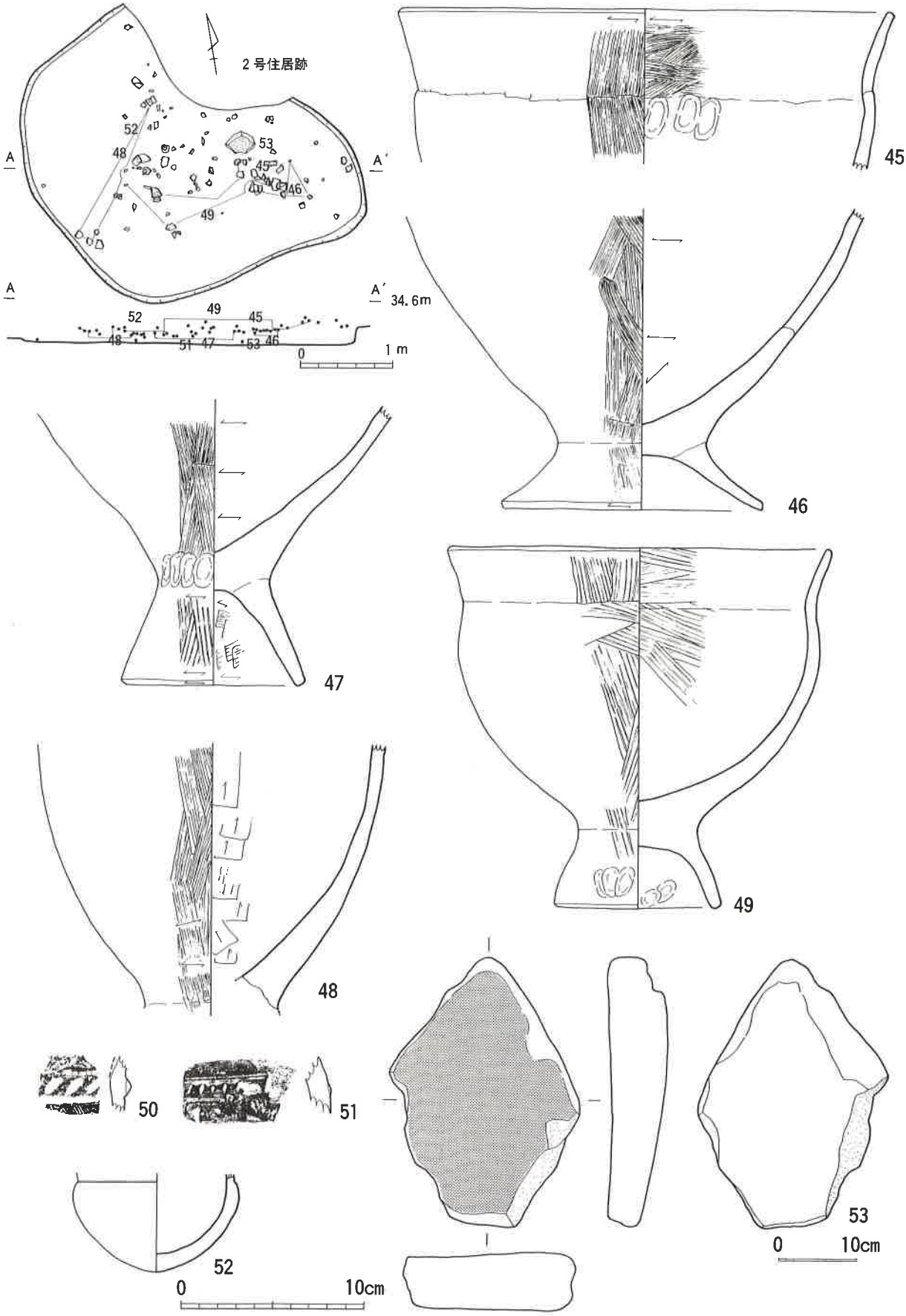
40は復元口縁径が約30cmの甕形土器で，頸部でくの字状に外反して口縁部に至り，頸部内面にはゆるい稜を有するものである。41は胴部最大径が約20cmを測り，肩部に３条の貼付突帯を有する壺形土器で，突帯付近から上下にハケによる丁寧な調整が施されている。42は壺形土器の頸部で，内外面に指圧痕が残る粗いナデ調整を施している。43は中央部が浅く窪む手捏ねによる土製品である。44は，復元口縁径が約11cmの手捏状の小型の鉢形土器で，内外面に指圧痕が数多く観察されるものである。



第27図　1号住居跡及び出土遺物

2号住居（第28図）

2号住居跡は，1号住居跡から約2.5m南側のB－3区から検出されたものである。北東側4分の1は攪乱をうけており，検出面から床面までも10cm前後と残存状況はよくない。残存状況から考えると300×300cm程度の隅丸方形になるものと考えられる。



第28図　2号住居跡及び出土遺物

45は復元口縁径27cmの甕形土器で頸部でゆるく外反し口縁部にいたるものであり，外面は頸部から口縁部へむけてハケによる掻き上げ状の調整が見られる。46は甕形土器の胴部から底部にかけての破片で，復元底部径14cmの低く大きく外に張り出す脚台を有するものである。47も46と同様に甕形土器の胴部から底部にかけての破片であるが，46に比してストレートで高い脚台を持つものである。48は甕形土器の胴部片で，脚台部とは胴部の粘土の接合部で剝離しているものである。49は球形の胴部からゆるやかに外反する口縁部を有する台付鉢形土器である。内外面には粗いハケによる調整と，ところどころに指頭圧痕やナデによる調整が見られるもので概して造りは粗いものの，胎土はほぼ均一な粘土を用い，色調は白橙色を呈している。50は甕形土器の頸部付近の破片で，貼付による刻目突帯を施している。51は壺形土器の肩部付近の破片で，低い貼付け突帯に浅い刻みを施すものである。52は坩形土器の頸部部から底部にかけての破片で，頸部から口縁部むけての立ち上がり部に段を有するものである。53は住居跡の東側部の遺物が集中している部分の北側で床着に近い状態で出土したものである。片面（図のスクリントン部）は使用により凸凹がなくなり滑らかであり，台石あるいは石皿として用いられたものであろう。石質は安山岩である。

3号住居跡（第29図）

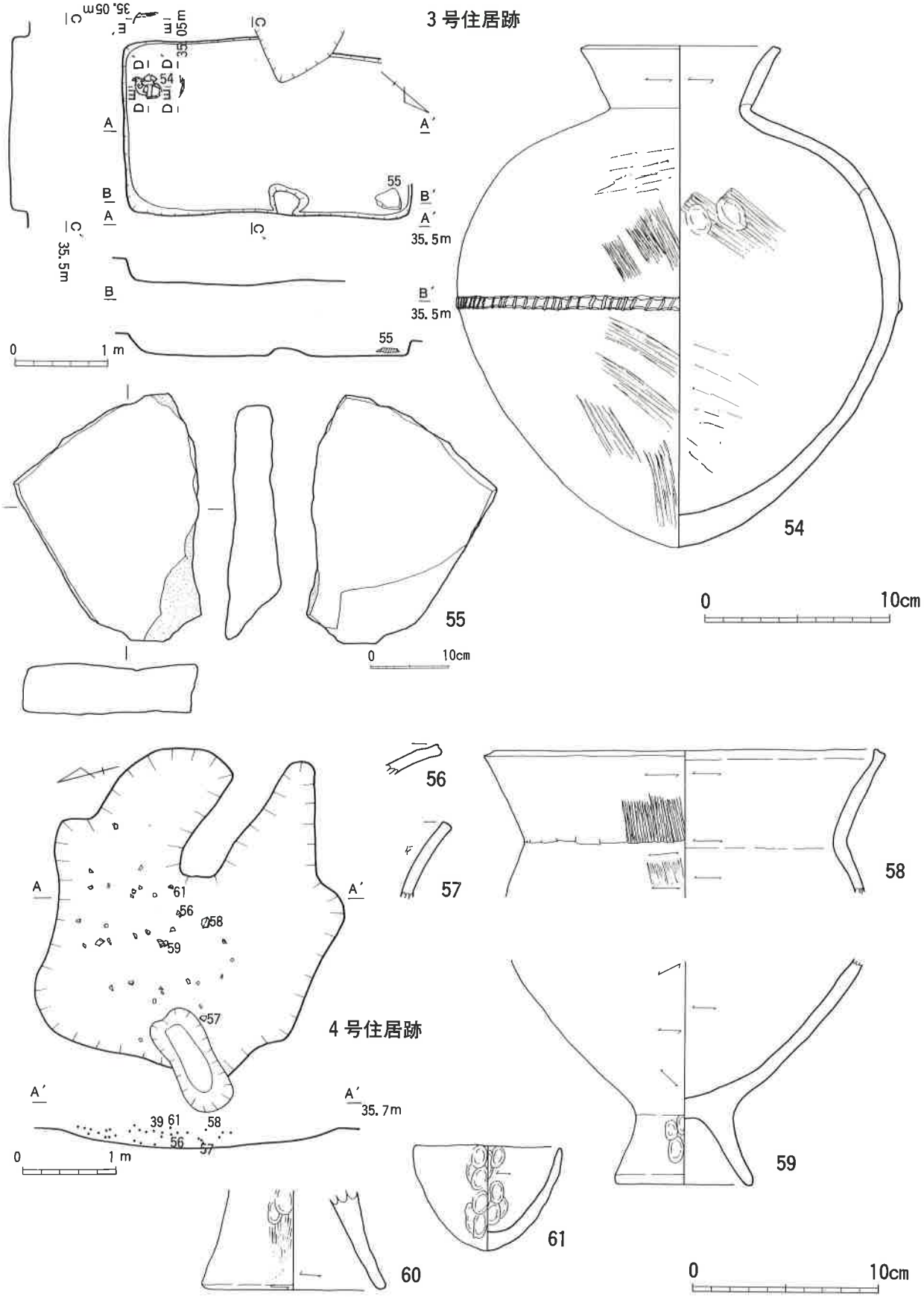
3号住居跡は2号住居跡の南側約10m，C－3区から検出された。検出された4基の住居跡の中では，南側と西側に攪乱を受けた部分があるものの最も残りがよかったものである。310×190cmの隅丸方形の平面プランをし検出面からの深さは25cmである。床は堅く硬く踏みしめられており，北側端は階段状の段が一段検出された。完掘後床面及び周辺を精査したものの柱穴らしきものは検出されなかった。出土遺物は，他の住居跡に比べると少なく，54・55の2点のみであった。

54は住居跡の北側コナー部で横倒しになった状態で出土したもので，復元口縁径約11cm，器高27cmの壺形土器である。球状の胴部の中央部が胴部最大径で，そこに貼付けによる1条の刻目突帯を施している。口縁部は頸部からのくの字に外反し口縁部でわずかに外反するものである。55は北側コナー近くで床着に近い状態で検出され，長軸32cm，短軸22cm，厚さ6cmの三角形をしたもので石質は安山岩である。両面ともに敲打痕や摩擦面などの使用痕は観察されない。

4号住居跡（第29図）

4号住居跡は3号住居跡の南側2.5m，D－3区から検出された。遺物は集中しているものの平面プランがはっきりしなかったことから，床面を確認し床面から検出を行う目的でミニトレンチを設定して掘り下げた。その結果，平面プランは不定形で床面は所々硬化ている状態であった。そこで，硬化面と遺物の出土状況をもって遺構の最終面とした。最終面の状況は中央を最深部とし皿状に窪むもので，床面から壁面への立ち上がりもはっきりしないものであった。また，遺物の出土も遺構の北側半分に集中している。

56は口縁部が大きく外反する壺形土器の口縁部で，口唇部及び口縁部内側に浅い窪みをもつもので，口縁端部内側の窪みは調整時のナデによるものと思われる。57はくの字状に外反する甕形土器の口縁部である。58は甕形土器の頸部から口縁部にかけての破片で，頸部でくの字状に外反し口縁部に至る。口縁部内側は端部にかけて浅く窪み器壁が薄い。また，頸部から口縁部にかけてはハケによる掻き上げの調整が施されている。59は甕形土器の胴部から底部にかけて，60は底部の破片あり，いづれも中空の脚台を有するものである。61は復元口縁径約8cm，器高6cmの手捏ねによる小型の鉢形土器であり，内外



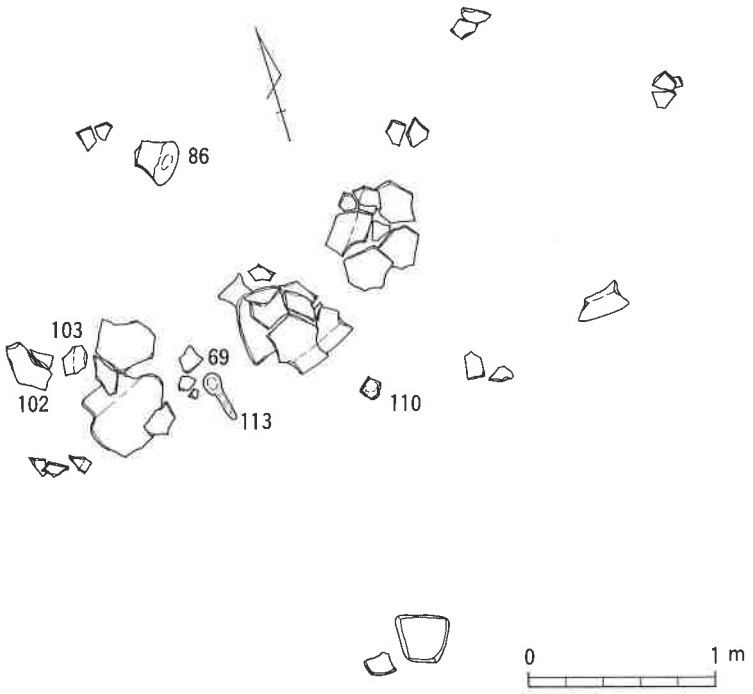
第29図　3・4号住居跡及び出土遺物

面に粗い指圧痕が数多く観察されるものである。

なお，４号住居跡は，確実に住居跡と言えるかどうかは疑問であるが，本遺跡の遺構中ではその形態が住居跡に近いため住居跡として報告したものである。

出土遺物（第31図～第32図）

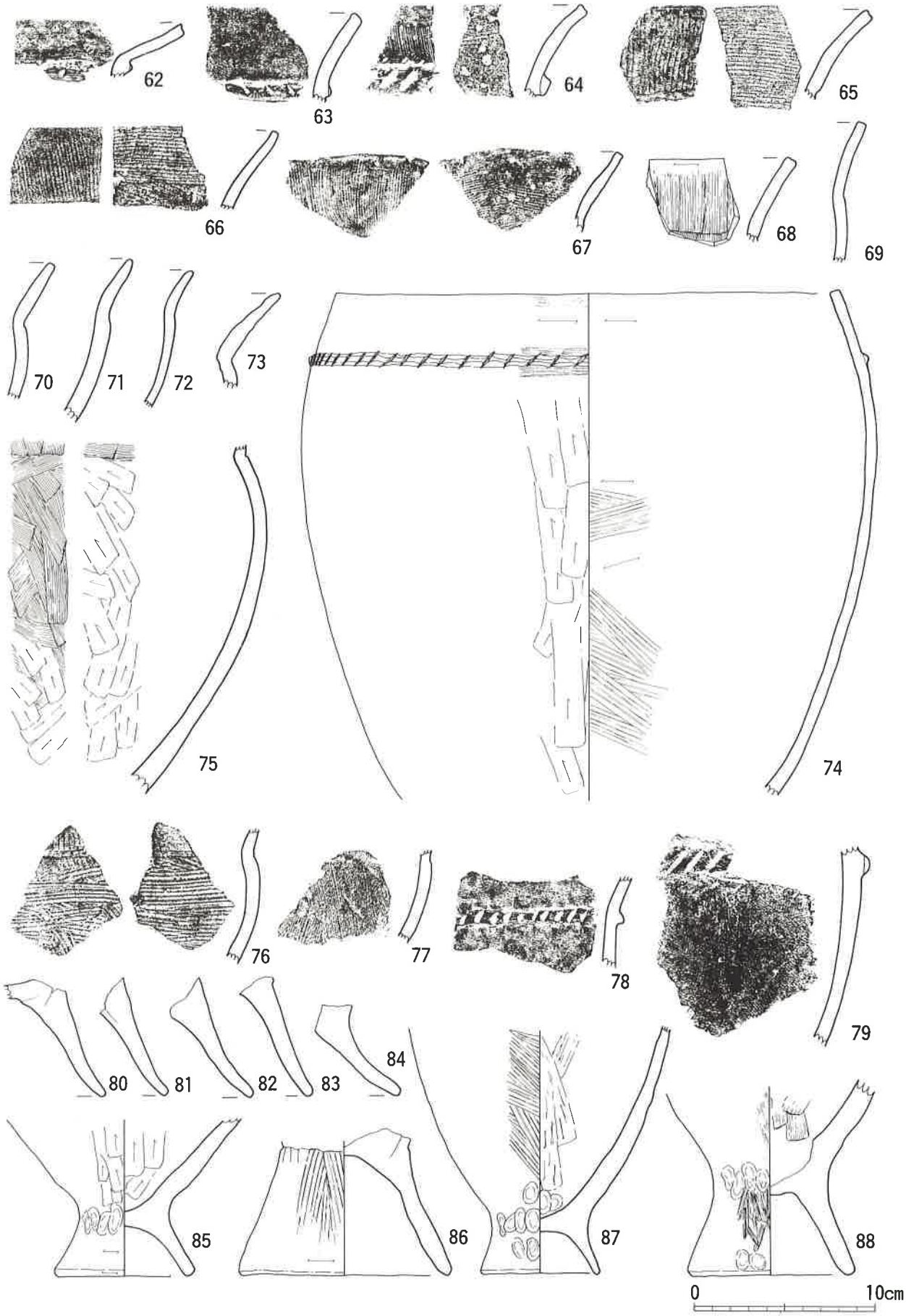
遺構以外からの出土遺物は，遺物集中箇所と包含層であるⅡ層から出土している。遺物集中箇所は，Ｄ－８区，Ｃ－４区，Ｃ－５区の３ヶ所から検出されており，Ｄ－８区の集中箇所からは杓子状の土製品や比較的大きな土器が出土したため，住居跡を想定して遺物取り上げ後，精査を行ったが遺構は検出されなかった。Ｃ－４区・Ｃ－５区の集中箇所は廃棄場所として使われていたためであろうか図化し得ない小片が多かった。



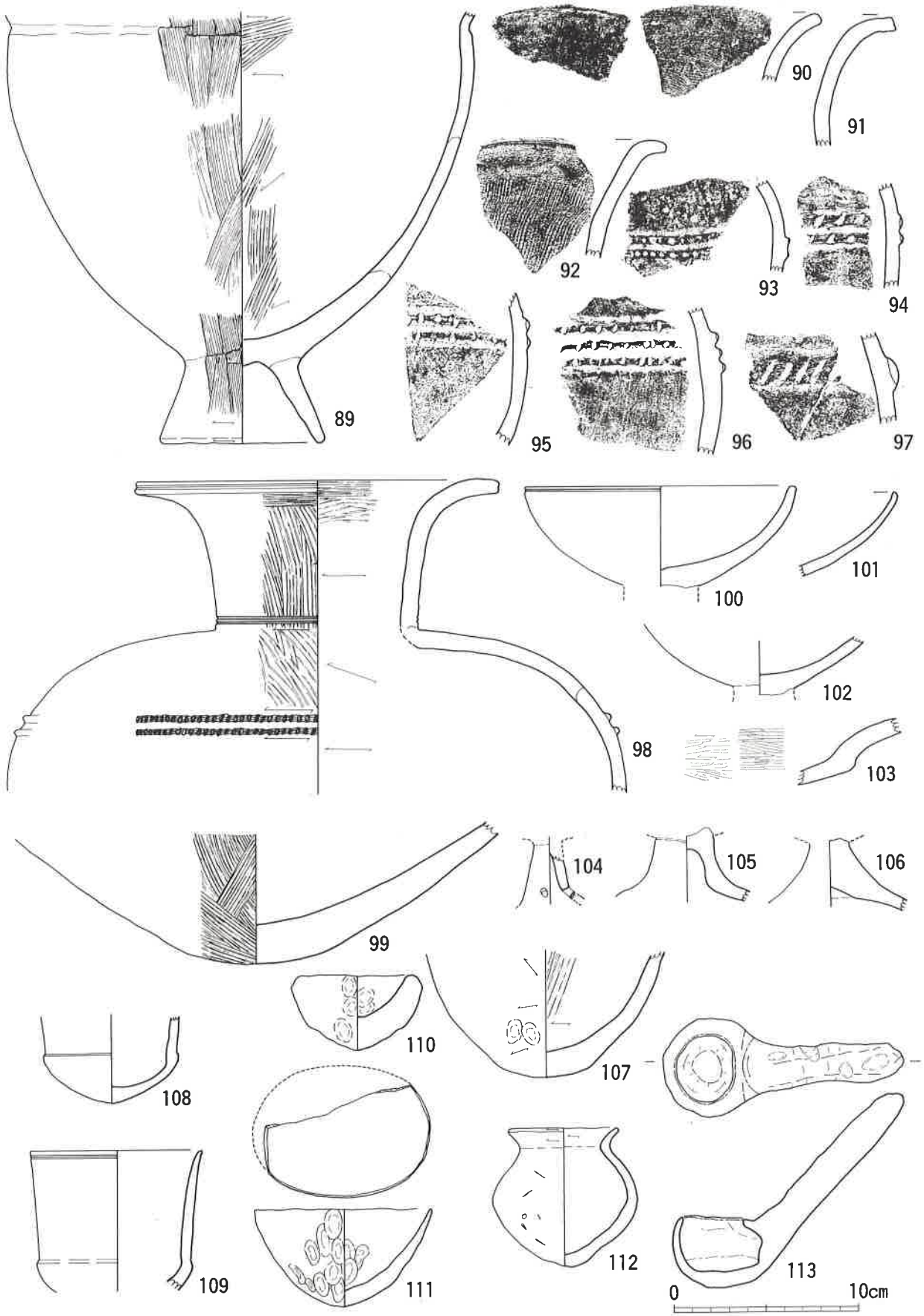
第30図　Ｄ－８区遺物出土状況

62～89は，甕形土器である。62は，大きく外反する口縁部で頸部に貼付による刻目突帯が施されるものであるがその傾きから他の器形の可能性もあるものである。63～68は頸部がくの字状に屈曲して口縁部に至るものであり，63・64はその頸部に貼付による刻目突帯が施されるものである。69～72は，頸部でゆるやかに屈曲して口縁部に至るもので，70～72はその造りも粗くヘラやハケによる粗いキズが観察される。73は頸部から大きく外反するもので，頸部から口縁部にかけてで以下を欠損しているが，住居跡２の49と同様の台付鉢形土器になると考えられる。内外面には粗いハケによる調整と，ところどころに指頭圧痕やナデによる調整が見られ，概して造りは粗いものの胎土はほぼ均一な粘土を用い，色調は白橙色であることも49と同様である。74は胴部から頸部にかけての破片であり，頸部でくの字状に屈曲して口縁部に至るものと考えられる。75は復元口縁径28cmを測り，口縁部が内側へ屈曲するいわゆる内湾口縁の甕形土器で，口縁下部に一条の貼付による刻目突帯が施されている。76～79は頸部付近の破片で，76～78は，頸部でくの字に外反するものであり，78は頸部に貼付による刻目突帯が施されている。79は，太い貼付による突帯の施すもので，あるが，甕形土器としたものの傾き等定かでなく他の器種の可能性もある。80～89は底部付近の破片である。80～84は接地面付近において脚台端部が外へ張り出すもの，85～89はストレートな脚台のものである。なかでも87は低い脚台から大きく張り出すもの，87は特に低く短い脚台を有するものである。

90～98は壺形土器である。90～92は口縁部，98は胴部から口縁部にかけての破片である。いづれもラッパ状に外反するもので，91・92・98は長い口縁部を有し器壁も厚く大型の壺形土器と思われる。特に，98では肩部に貼付けによる細い２条の突帯に充つな刻みが施され，外面には粗いハケによる調整が施されている。93・94・95・96・97は壺形土器の胴部の破片で１条～３条の貼付けによる刻目突帯が施


62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
0
10cm

第31図　出土遺物１


89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
0
10cm

第32図　出土遺物２

されるものである。99は丸底の壺形土器の底部で，器壁もぶ厚く大型の壺形土器になるものと考えられる。

100～106は高坏である。101・102は坏部底面から内湾しながら口縁部に至るもので，100は口縁部外面に一条の沈線が施され，坏部と脚部の粘土の接合面で剝離痕跡が観察される。102も100・101と同様の器形になるものと考えられる。103は坏部底面からやや内湾ぎみに立ち上がり，口縁部で大きく外側へ外反するもので長い口縁部を持つ大型の高坏になるものと考えられる。104～106は小型の高坏の脚台である。形状は裾部がゆるやかに外開きするもので，104・105は裾部がやや屈曲するものである。また，104は円形の透孔を等間隔に4孔穿っている。107は小型の壺形土器あるいは鉢形土器の底部で外面に指頭圧痕やナデによる調整のあとが観察されるものである。108・109は坩である。丸底で胴部最大径より口縁径が大きく浅い胴部から口縁部への立ち上がりには段を有するものである。

110は器壁が厚く指圧痕の顕著に残るミニチュア土器である。111は上面観が楕円形をし，指頭圧痕が顕著に残る手捏ね状の鉢形土器である。112は小型の丸底壺で，手捏ねによるものであろうか，概して造りは粗く器壁も一定していない。外面にはヘラ等の工具によると思われるキズも多く観察される。113は杓子形をする土製品で，U字状の深い体部に斜めにやや長い柄部を付け，パイプ状になるものである。

表４　松尾平遺跡出土遺物観察表（一）

図	番号	地点	層	器種	部位	調整(外)	調整(内)	備考
24	1	ミゾ		甕形土器	口縁部	ナデ	ナデ	
〃	2	ミゾ		甕形土器	口縁部	ナデ	ハケ	頸部から口縁部に向けてカキアゲ
〃	3	ミゾ		甕形土器	口縁部	ナデ	ナデ	口縁部に沈線
〃	4	ミゾ		甕形土器	口縁部	ハケ	ナデ	頸部から口縁部に向けてカキアゲ
〃	5	ミゾ		甕形土器	口縁部	ナデ	ナデ	
〃	6	ミゾ		甕形土器	口縁部	ナデ	ハケ	頸部から口縁部に向けてカキアゲ　調整が全体に粗い
〃	7	ミゾ		甕形土器	頸部	ナデ	ナデ	
〃	8	ミゾ		甕形土器	胴部	ハケ	ナデ	刻目突帯
〃	9	ミゾ		高坏	脚部	ミガキ	ナデ	脚部と体部の境に接合痕
〃	10	ミゾ		鉢	脚部	指頭圧痕	ナデ	手捏　接合痕
〃	11	ミゾ		甕形土器	脚部	ハケ	ナデ	
〃	12	ミゾ		甕ｏｒ壺	胴部	ナデ	ナデ	刻目突帯４条
〃	13	ミゾ		甕形土器	胴部	ナデ	―	刻目突帯４条　胎土に黒曜石を含む　内側から外表面近くまで真黒に焼けている
〃	14	ミゾ		壺形土器	胴部	ミガキ	ヘラナデ	内側にヘラ傷痕数条
〃	15	ミゾ		手捏土製品	―	指頭圧痕	―	杓子の柄部？
25	16	土壙１		甕形土器	胴部	ハケ	ハケ	
〃	17	土壙１		高坏	脚部	ハケ	ナデ	内面に指頭圧痕
〃	18	土壙２		壺形土器	胴部	ハケ	ハケ	刻目突帯２条
〃	19	土壙２		壺形土器	胴部	ハケ	ハケ	刻目突帯２条
〃	20	土壙２		甕形土器	口縁部	ハケ	ハケ	刻目突帯
〃	21	土壙２		甕形土器	口縁部	ナデ	ハケ	刻目突帯
〃	22	土壙２		甕形土器	口縁部	ハケ	ハケ	頸部から口縁部に向けてカキアゲ　刻目突帯
〃	23	土壙２		甕形土器	口縁部	ナデ	ナデ	刻目突帯
26	24	土壙２		高坏	口縁部	ナデ	ハケ	口唇部に凹線　頸部から口縁部に向けてカキアゲ
〃	25	土壙３		甕形土器	頸部	ハケ	ナデ	頸部から口縁部に向けてカキアゲ
〃	26	土壙３		壺形土器	口縁部	ナデ	ナデ	
〃	27	土壙３		壺形土器	頸部	ナデ	ナデ	縦にヘラ傷痕
〃	28	土壙３		甕形土器	口縁部	ハケ	ハケ	
〃	29	土壙３		壺形土器	胴～底部	ハケ	ナデ	胴部に焼成後の穿孔
〃	30	土壙３		石製品	―	―	―	
〃	31	土壙７		甕形土器	口縁部	ナデ	ハケ	
〃	32	土壙７		鉢	口縁部	ナデ	ナデ	手捏
〃	33	土壙７		甕形土器	口縁部	ナデ	ナデ	頸部に突帯
〃	34	土壙７		甕形土器	頸部	ハケ	ハケ	内面丹塗
〃	35	土壙７		壺形土器	口縁部	ハケ	ハケ	
〃	36	土壙７		高坏	胴部	ナデ	ナデ	
〃	37	土壙７		高坏	脚部	ナデ	ナデ	穿孔４　外面丹塗
〃	38	土壙７		石製品	―	―	―	
〃	39	土壙７		石製品	―	―	―	
27	40	住居１		甕形土器	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	外面丹塗
〃	41	住居１		壺形土器	胴部			
〃	42	住居１		壺形土器	頸部	ナデ	ナデ	
〃	43	住居１		土製品	―	ナデ	―	手捏
〃	44	住居１		鉢状土製品	体部	ナデ	ナデ	手捏
28	45	住居２		甕形土器	口縁部	ハケ	ハケ	頸部から口縁部に向けてカキアゲ
〃	46	住居２		甕形土器	体～脚部	ハケ	ハケ	脚付　外面，内面丹塗
〃	47	住居２		甕形土器	体～脚部	ハケ	ナデ	脚付　外面丹塗
〃	48	住居２		甕形土器	胴部	ハケ	ハケ	脚付　外面丹塗
〃	49	住居２		台付鉢	完形	ハケ	ハケ	内外とも粗いハケ
〃	50	住居２		壺形土器	胴部	ナデ	ナデ	刻目突帯

表５　松尾平遺跡出土遺物観察表（二）

図	番号	地点	層	器種	部位	調整(外)	調整(内)	備考
28	51	住居２		壺形土器	胴部	ナデ	ナデ	刻目突帯　外面が真っ黒に焼けている
〃	52	住居２		壺形土器	体部	ナデ	ナデ	ミニチュア土器
〃	53	住居		台石	―	―	―	
29	54	住居		壺形土器	ほぼ完形	ナデ	ナデ	外面，内面丹塗
〃	55	住居		台石	―	―	―	中央部に若干の凹み
〃	56	住居４		高坏	口縁部	ナデ	ナデ	口唇部に凹線
〃	57	住居４		甕形土器	口縁部	ハケ	ナデ	頸部から口縁部に向けてカキアゲ
〃	58	住居４		甕形土器	口縁部	ハケ	ナデ	口唇部に凹線
〃	59	住居４		甕形土器	胴～脚部	ナデ	ナデ	外面丹塗
〃	60	住居４		壺形土器	口縁部	ハケ	ナデ	外面，内面丹塗
〃	61	住居４		鉢状土器	体部	ナデ	ナデ	手捏，指頭圧痕
31	62	D－8,9	Ⅱ	甕形土器	口縁部	ナデ	ナデ	くびれ部に刻目突帯
〃	63	C－６	Ⅱ	甕形土器	口縁部	ナデ	ナデ	くびれ部に刻目突帯
〃	64	A－３	Ⅱ	甕形土器	口縁部	ナデ	ナデ	くびれ部に刻目突帯　刻み目にハケメ，突帯の上部にヘラによる刺突痕　口唇部に凹線
〃	65	C－４	Ⅱ	甕形土器	口縁部	ハケ	ハケ	口唇部に沈線
〃	66	A－３	Ⅱ	甕形土器	口縁部	ハケ	ハケ	
〃	67	C－４	Ⅱ	甕形土器	口縁部	ハケ	ハケ	
〃	68	A－３	Ⅱ	甕形土器	口縁部	ハケ	ハケ	外面が真っ黒に焼けている
〃	69	D－８		甕形土器	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	
〃	70	D－７	Ⅱ	甕形土器	口縁部～胴部	ナデ	ハケ	
〃	71	Z－２	Ⅱ	鉢	口縁部～胴部	ハケ	ハケ	造りが雑で全体的にややいびつ
〃	72	A－３	Ⅱ	鉢	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	造りが雑で全体的にややいびつ
〃	73	A－３		鉢	口縁部	ナデ	ナデ	造りが雑で全体的にややいびつ
〃	74	C－３	Ⅱ	甕形土器	口縁部～胴部	ヘラナデ	ナデ	内湾口縁
〃	75	C－６	Ⅱ	甕形土器	体部	ハケ	ナデ	外面，内面に丹塗
〃	76	C－３	Ⅱ	甕形土器	胴部	ハケ	ハケ	頸部から口縁部に向けてカキアゲ
〃	77	A－３	Ⅱ	甕形土器	胴部	ハケ	ナデ	頸部から口縁部に向けてカキアゲ
〃	78	B－３	Ⅱ	甕形土器	頸部	ナデ	ナデ	刻目突帯
〃	79	C－４	Ⅱ	甕形土器	胴部	ハケ	ナデ	刻目突帯　刻み目にハケメ
〃	80	C－６	Ⅱ	高坏	脚部	ミガキ	ミガキ	
〃	81	C－６	Ⅱ	高坏	脚部	ナデ	ナデ	
〃	82	C－３	Ⅱ	高坏	脚部	ナデ	ナデ	
〃	83	C－６	Ⅱ	高坏	脚部	ハケ	ナデ	
〃	84	Z－２	Ⅱ	高坏	脚部	ハケ	ナデ	
〃	85	Z－２	Ⅱ	甕形土器	脚部	ナデ	ハケ	外面丹塗
〃	86	D－８		甕形土器	脚部	ハケ	ナデ	
〃	87	D－２	Ⅱ	甕形土器	胴部～脚部	ナデ	ナデ	
〃	88	Z－２	Ⅱ	甕形土器	脚部	ハケ	ナデ	
32	89	D－２	Ⅱ	甕形土器	胴部～底部	ハケ	ハケ	
〃	90	C－４	Ⅱ	壺形土器	口縁部	ハケ	ハケ	
〃	91	Z－２	Ⅱ	壺形土器	口縁部	ハケ	ナデ	頸部から口縁部に向けてカキアゲ
〃	92	A－３	Ⅱ	壺形土器	口縁部	ハケ	ナデ	
〃	93	C－６	Ⅱ	壺形土器	胴部	ナデ	ナデ	刻目突帯２条
〃	94	A－３		甕形土器	胴部	ナデ	ハケ	刻目突帯２条
〃	95	A－３		高坏	胴部	ナデ	ナデ	刻目突帯２条
〃	96	C－６		壺形土器	胴部	ハケ	ナデ	刻目突帯３条
〃	97	C－４	Ⅱ	壺形土器	胴部	ハケ	ナデ	刻目突帯
〃	98	C－５		壺形土器	ほぼ完形	ハケ	ハケ	刻目突帯２条　頸部から口縁部に向けてカキアゲ
〃	99	C－４		壺形土器	底部	ハケ	―	風化が激しく内面調整不明
〃	100	C－２	Ⅱ	高坏	坏身部	ナデ	ナデ	口縁部に沈線

表６　松尾平遺跡出土遺物観察表（三）

図	番号	地点	層	器種	部位	調整(外)	調整(内)	備考
32	101	D－8	Ⅱ	高坏	口縁部	ナデ	ナデ	
〃	102	D－8		高坏	底部	ハケ	ナデ	
〃	103	D－7	Ⅱ	高坏	体部	ナデ	ナデ	胴部に一段張り出し
〃	104	D－8	Ⅱ	高坏	脚部	ナデ	ナデ	ミニチュア土器　透穴４つ
〃	105	C－6	Ⅱ	高坏	脚部	ナデ	ナデ	
〃	106	C－6	Ⅱ	高坏	脚部	ナデ	ナデ	
〃	107	C－6		壺形土器	底部	ナデ	ナデ	全体的にややいびつ
〃	108	C－4	Ⅱ	坩	底部	ナデ	ナデ	
〃	109	A－3		坩	体部	ナデ	ナデ	口縁部に沈線
〃	110	D－8	Ⅱ	碗状土製品	ほぼ完形	ナデ	ナデ	手捏　ミニチュア土器　指頭圧痕　全体的にいびつ
〃	111	A－3	Ⅱ	碗状土器	体部	ナデ	ナデ	長楕円形　指頭圧痕
〃	112	D－8	Ⅱ	壺形土器	ほぼ完形	ナデ	ナデ	ミニチュア土器
〃	113	D－8	Ⅱ	杓子状土器	完形	ナデ	ナデ	手捏　柄部に指頭圧痕　全面丹塗？

第3章　ま　と　め

旧石器時代について

遺物取り上げ総数819点で，78点を図示した。台形石器を主体としてナイフ形石器群と細石器群が存在しているが，両者の明確な区分は明らかにできていない。遺物の出土はＢ－３区・Ｃ－３区に集中し，分布状況が重なることから平面的出土位置の区分は認められない。また，同一層での検出であり，垂直的な分離も困難な状況である。だからといって，この両石器群が共存関係にあるとは考えられず，時間差の中での同一ステージの生活展開と判断できる。

ここで，ナイフ形石器の石器群について把握してみたい。検出および分布状況から，確認された台形石器・角錐状石器・剝片尖頭器・ナイフ形石器等は同一時期の石器と判断され，また，楔形石器も使用石材から同一時期と言える。詳細な編年的位置づけはできていないが，ＡＴ堆積以降の石器文化であることは違いない。

石器群の中で占有率が高い台形石器に関しては，形態的に４類に区分できた。１類の台形石器は，先に記したように素材剝片の先端部を分割除去し，その分割面と打面を測縁としている。この１類に類似したものとして百花台型台形石器が考えられるが，素材剝片に大きな違いが存在することを指摘できる。すなわち百花台型台形石器が小型縦長剝片を素材とした小型の台形石器であるのに対し，１類はいわゆる不定形剝片（本遺跡では縦長剝片や刃器生産技術は確立していない。そのため，幅広の剝片や幅広の縦長剝片が使用されている）を素材とする違いが認められる。２類の台形石器は形状及び素材剝片の剝出から，原の辻型台形石器との検討を要すと思われる。３類の台形石器に関しては，素材剝片の特徴及び、刃潰し加工が３面に及ぶことから個性的な１群と捉えたい。４類の台形石器に関しては，広範に枝去木型台形石器の範疇で捉えたいが，基部の造り出しやそれに伴う調整剝離の手法，さらに資材剝片の選択に本遺跡独自の個性があると判断できる。なお，18（主要剝離面はそのままで，両側縁部に背面方向に急角度の側縁調整加工を行う）と22の断面形が台形状をもつ角錐状石器の組合せは平戸市金柑茶屋第２遺跡が指摘できる。また，鋸歯状刃部の鋸歯は，意図的に加工されている。　　（長野）

（参考文献）

中川　和哉　「台形石器考」『旧石器考古学35』旧石器文化談話会　1987

小畑　弘己　「台形石器」『季刊考古学第４号』雄山閣　1983

熊本県教育委員会　「狸谷遺跡」『熊本県文化財調査報告第90集』熊本県教育委員会　1987

平戸市土地開発公社　「長崎県平戸市大久保町字山頭金柑茶屋第２遺跡」　1978

縄文時代について

松尾平遺跡から出土した縄文時代の遺物は少なく，時代的には縄文時代早期と晩期が小量出土している。

以下，遺物・遺構の特徴について述べてみたい。

〈遺　構〉

縄文時代早期に該当する集石が１基検出された。出土土器は縄文時代早期の条痕文土器の出土量が多く，次いで押型文土器である。この両型式は，中九州や東日本に源を持つ移入土器であり，本遺跡の集石遺構は両型式に帰属する可能性が高い。こうした外来系土器文化（移入土器）に伴う集石遺構は発見例が少なく，今回の調査の成果は今後の南九州縄文文化を考える上での貴重な参考資料となろう。

〈遺　物〉

縄文時代の遺物は早期が中心で，円筒形条痕文土器・格子状押型文土器・山形押型文土器などが出土している。円筒形条痕文土器は中九州地域を中心とした土器文化で，本書のⅠａ類は鹿児島でも東郷町の「五社遺跡」・溝辺町「石峰遺跡」・横川町「中尾田遺跡」・栗野町「花ノ木遺跡」・栗野町「木場Ａ遺跡」などでも確認されており，鹿児島県北部に集中する。Ⅰｃ・Ⅰｅ類は東市来町「仮牧段遺跡」「上二月田遺跡」・吉田町「小山遺跡」などで出土している。

押型文土器は県内各地で出土しているが，今回松尾平遺跡で出土した格子状押型文土器は，わずか数例の報告があるだけである。三代寺遺跡で報告されている格子目押型文土器は，口縁部の形態・文様の形・口縁部内面の条痕の点で相違点があげられ，石峰遺跡での細線格子状押型文土器は，口縁部及び口唇部の形態・その名のとおり格子がかなり細い点で相違が伺える。最も酷似しているものとして，石塚遺跡の格子目押型文土器があげられよう。

このように，松尾平遺跡には円筒形条痕文土器や押型文土器など外来土器（移入土器）が見られ，縄文時代早期後半に，外来土器文化の影響を受けた文化が栄えていた事が伺い知れる。やはりこれも市来という地が持つ地理的条件の影響かもしれない。　（新町）

（参考文献）

東郷町教育委員会　「五社遺跡」『東郷町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』　1986

鹿児島県教育委員会　「石峰遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書⑿』　1980

鹿児島県教育委員会　「中尾田遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書⒂』　1981

鹿児島県教育委員会　「花ノ木遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』　1975

栗野町教育委員会　「木場Ａ遺跡２」『栗野町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』　1994

東市来町教育委員会　「仮牧段遺跡」『東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』　1991

東市来町教育委員会　「上二月田遺跡」『東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』　1988

鹿児島県教育委員会　「三代寺遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書⑾』　1979

鹿児島県教育委員会　「春田遺跡・石塚遺跡・坂ノ下遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書⒆』　1991

古墳時代について

松尾平遺跡において検出された遺構は，土壙が７基，溝状遺構が１条，住居跡が４基であった。以下，遺構ごとにその特徴について述べてみる。

土　壙

検出された土壙のうち土壙１～６は，調査区西側の住居跡が検出された付近，３号住居と４号住居の間に東西に並ぶように位置している。形態的には土壙４と土壙５・６（この２基は本来一つの土壙であったと思われる」が長楕円形で類似しているのみで他の土壙は楕円形，円形，隅丸方形と定型化はみられないことからそれぞれの機能も異なるものであろうか。特筆されるのは，土壙２と３である。土壙２は楕円形をし，本文でも述べたように底面の壁に沿うような状況でＵ字の浅い溝がめぐらされている。また，土壙３は底面中央部に浅い皿状の窪みを持ち，出土遺物も土壙の検出面よりも約110㎝上面ではあるものの29のような穿孔された壺形土器や底面の窪み部から石製品が出土し，埋土も焦土や炭化物を多く含むなど祭祀や埋葬など特殊な目的で用いられた土壙と考えられる。土壙７は，調査区の南端の溝状遺構を切るような状況で検出されるものであるが，その時期が溝状遺構と同時期であり，溝状遺構に関連して機能するものであるのか，それとも単独に機能するものであるのか等については定かではない。今後の類例の増加に期待したいものである。

溝状遺構

溝状遺構は調査区の南端から検出され，その規模は南北に約15ｍ程度であり北側へ傾斜している。当時はもっと規模の大きなものであったと考えられるが，北側は耕作により削平され，南側は道路建設によって消失している。本遺跡で検出された溝状遺構は１条の残存部分だけであるので，集落を取り囲むもの，防御用等々の性格については明らかではないが，その形状等は，吹上町の辻堂原遺跡の溝状遺構２に類似しているようである。

住居跡

本遺跡で住居跡として報告したのは４基である。４基のプランをみてみると，１号住居跡は，南側約３分の１が攪乱であり本来は長方形，２号住居も北東側約４分の１が攪乱であり本来は方形，３号住居跡はイモ穴があるものの明らかに長方形である。４号住居は，不定型を呈し，床面も皿状に窪んでいる。東側の遺物の出土がない部分を攪乱と考えると，長方形のプランとも考えられるが，張り出しをもつものという考えも可能ではないかとの指摘もある。どの住居跡からもピットは検出されていない。なお，本文も述べたがこの４号住居跡はその形状からして別の機能を有する機構の可能性もあり，南北に住居跡が並んでいることと，本遺跡で出土した遺構の中では住居跡の形態に近いことから住居跡として報告したものである。

住居跡内の遺物は確実に床着として検出された比較的まとまった資料は，３号住居跡の54のみであるが，埋土中から出土した甕形土器を中心に考えると，口縁部がくの字状に外反し，口縁部内側に明瞭な稜がないのが特徴である。出土遺物は絶対数が少なく，遺構の残存度もよくないことや切り合い関係がないことから，絶対的な判断はできないものの近年の資料の蓄積から考えると内湾口縁に先行する時期が主であると考えられる。

遺　物

遺物は数ケ所の土器集中箇所を中心に出土している。中でも特筆されるのが多量の甕形土器，壺形

土器等の小片に混じって，坩・手捏土器やミニチュア型土器が無造作に含まれていることである。つまり，生活によって生じた廃棄物は食に関するものであれ，祭祀に関するものであれ，全て一括して廃棄するという意識の一端がそこには感じられるようである。遺物については，小片が多かったが，住居跡同様に甕形土器を中心にして見ていくと，内湾口縁を呈するものは74など少量であり，口縁部がくの字状に外反し，口縁内側に稜がないものが主である。このことから，比較的短期間に廃棄された可能性があるのではなかろうか。

以上，松尾ノ平遺跡の古墳時代の調査では，住居跡，土壙，溝状遺構，土器廃棄場所等が検出され，この遺跡が集落として機能していたことがわかる。溝状遺構が調査区の東端に検出され，住居跡とは直線距離で約50ｍも離れており，その間には何等の遺構も存在しないことや溝状遺構の規模に比して住居跡等の遺構が少ないこと，また，個々の土壙の果たした役割などについては，今後薩摩半島西側における資料の増加に期待したい。（鶴田）

（参考文献）

「辻堂原遺跡」吹上町教育委員会　1977年

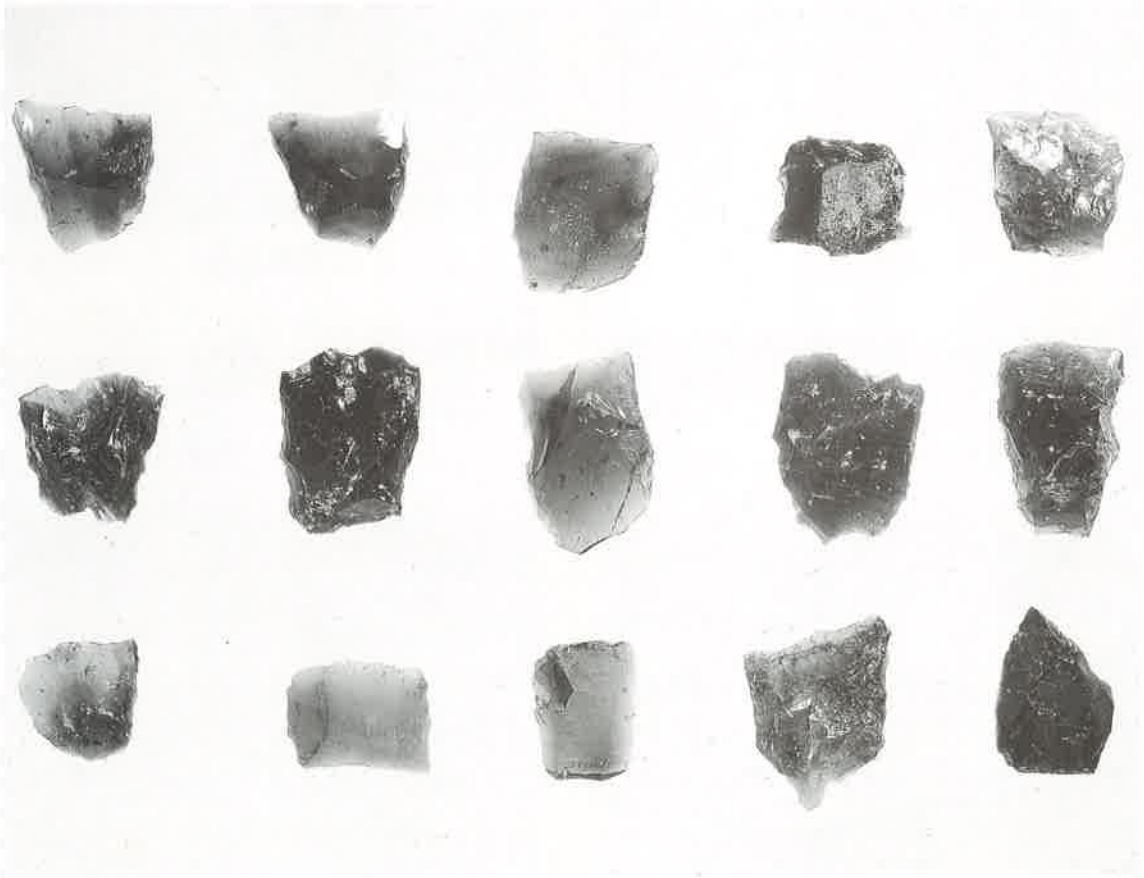
「萩原遺跡」姶良町教育委員会　1978年

「成川式土器の細分編年試案」池畑　耕一，鹿児島考古第14号　1980年

「成川式土器の検討」多々良友博，鹿児島考古第15号　1981年

図　　版

1　台形石器剝片尖頭器



2　台形石器

図版2　発掘状況

遺跡遠景

発掘風景

発掘風景

実測風景

古墳時代遺物出土状況

旧石器時代遺物出土状況

図版3　縄文時代出土遺物

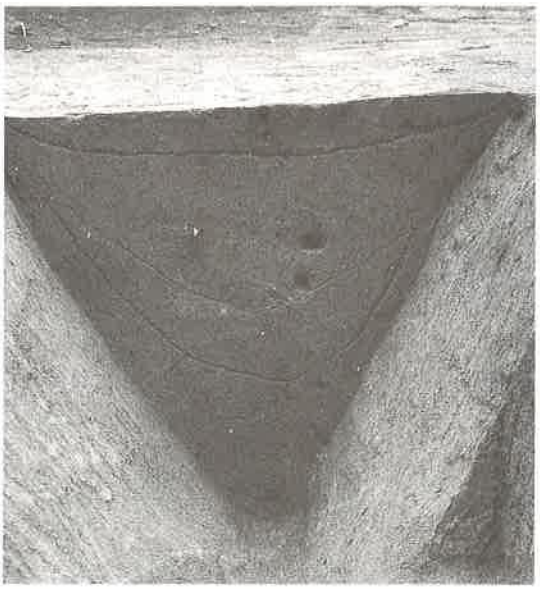
図版4　溝状遺構

土層断面

土層断面

溝状遺構

溝状遺構



溝状遺構断面

土　壙1

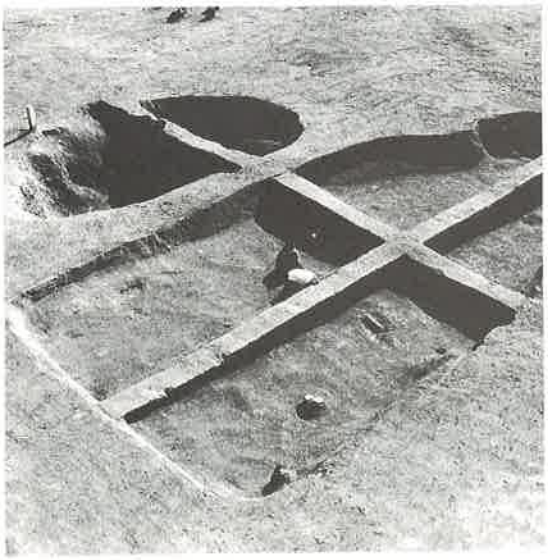
図版5　土壙及び住居跡

土　壙2

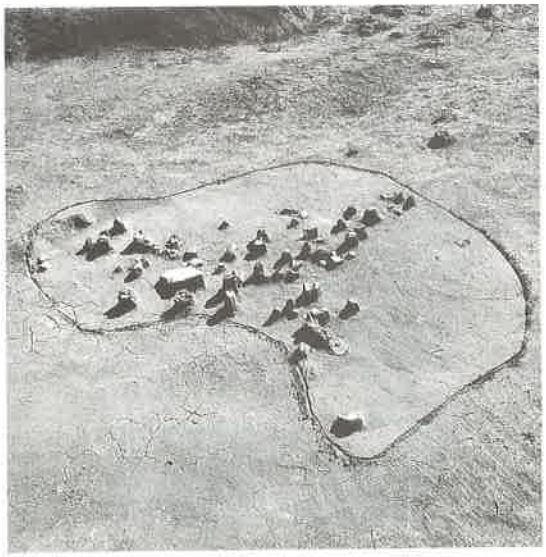
土　壙3

土　壙5・6

土　壙7



1号住居跡

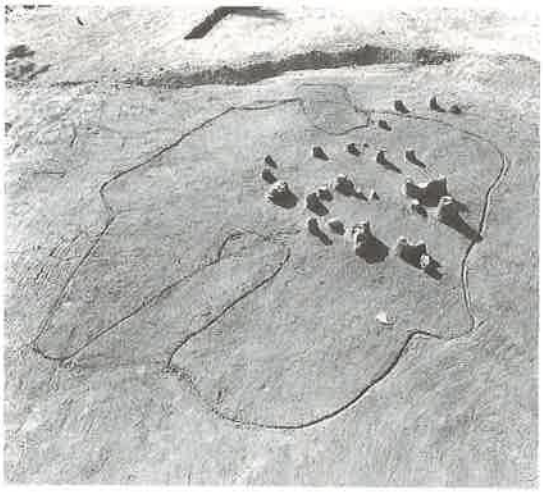


3号住居跡

図版6　住居跡及び古墳時代出土遺物(一)

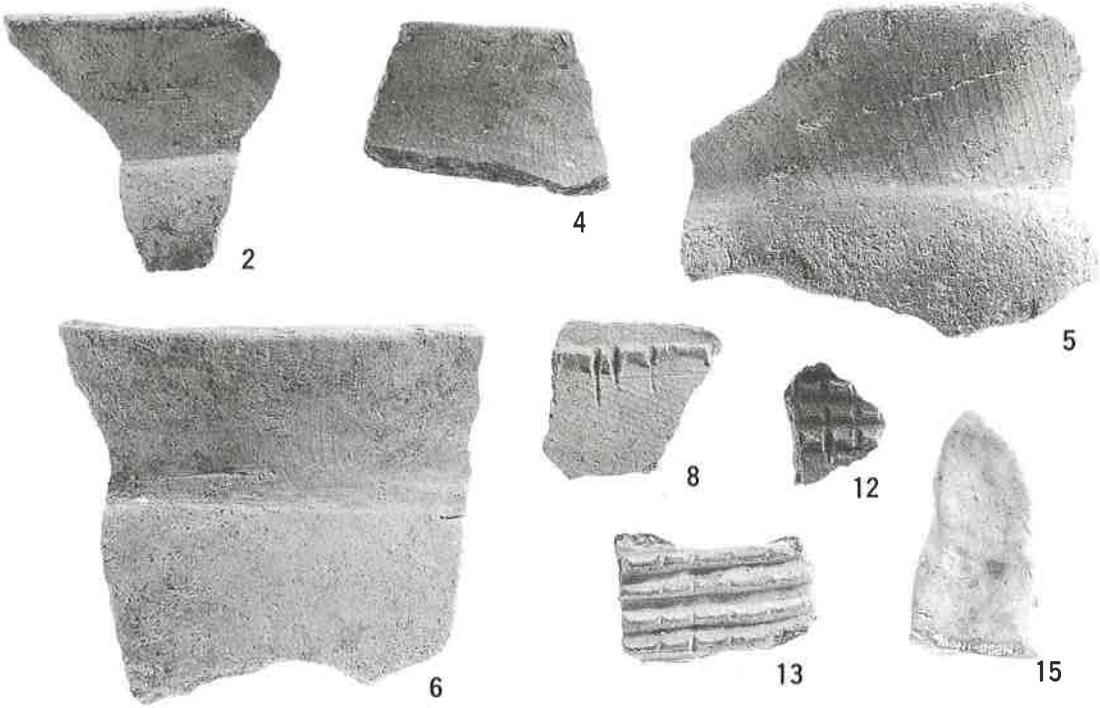
3号住居跡

3号住居跡遺物出土状況

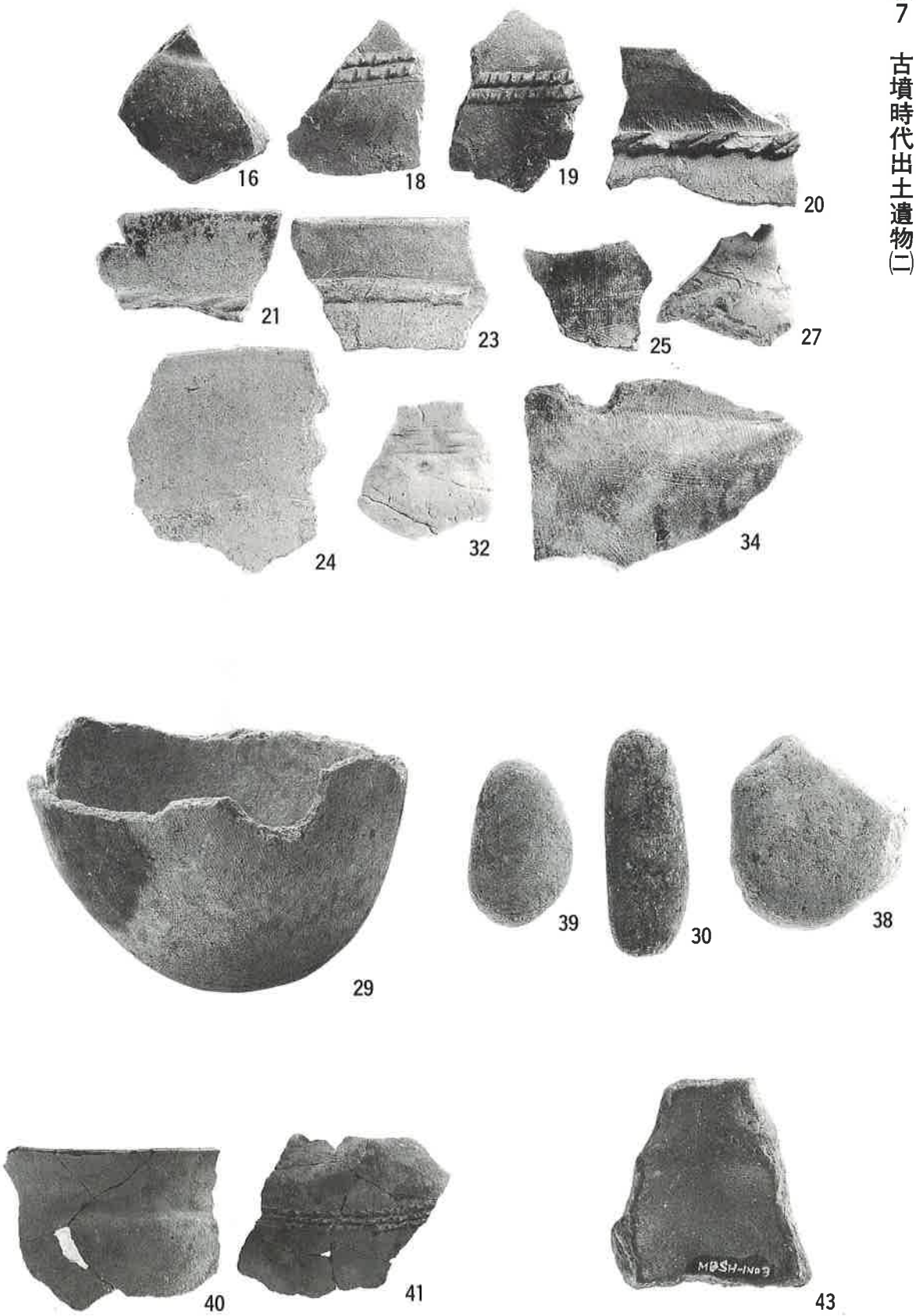


4号住居跡

土器集中箇所遺物取り上げ



図版7　古墳時代出土遺物(二)



図版8　古墳時代出土遺跡(三)

47

49

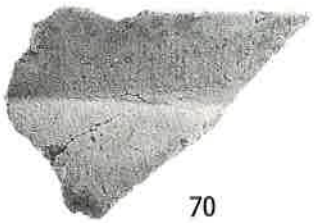
53

54

55

63

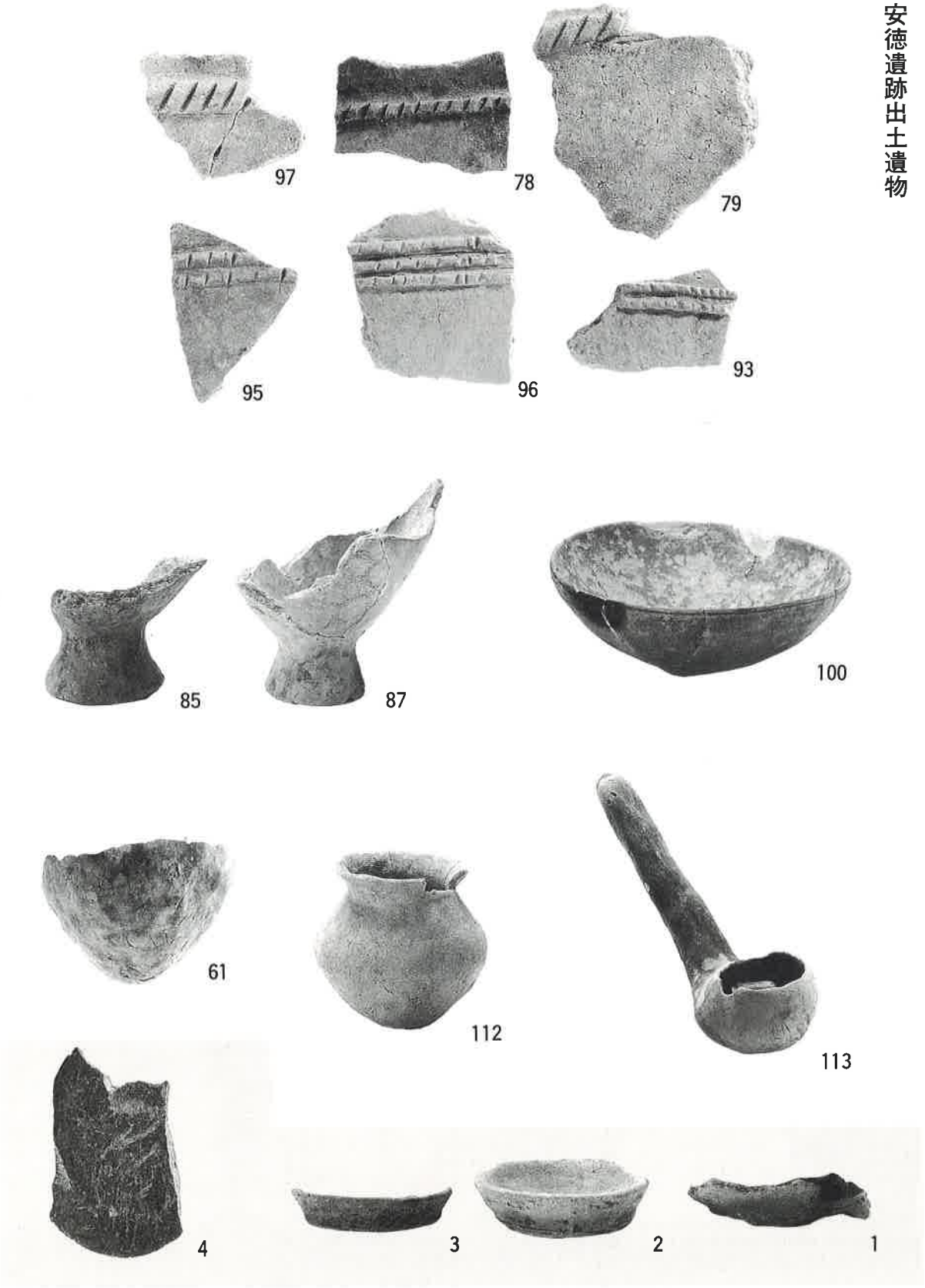
69


70

71

72

73



安徳遺跡出土遺物

あ と が き

松尾平遺跡は，平成４年度に発掘調査がなされた。ちょうどその頃，私は南九州西回り自動車道建設に伴う確認・全面発掘調査に携わっていた。現場では第１期の長期研修生が現場研修をしており，その内の一人が市来町の松尾平遺跡に研修現場を移した。市来町でも調査をやっているんだな～という軽い気持ちでいたのだが，まさか一年後，市来町に行き報告書を書くはめになろうとは夢にも思わなかったのであります。そういう訳で，調査担当の長野・鶴田・大久保の各氏，私としては初めての報告書であり何かとご指導・ご助言下さいました新東・中村・宮田・八木沢の各氏，その外県立埋蔵文化財センター職員の皆さんには大変お世話になりました。また，発掘作業・整理作業に携わって下さった皆さん，これらの人々のお力により本報告書は刊行の運びとなりました。記して感謝の意を表します。

調査員のみなさん

市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
県営農村活性化住環境整備事業大里地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

松尾平遺跡（まつおのびら）
安徳遺跡（あんとく）

発行日　平成7年3月31日
発　行　市来町教育委員会
〒899-21　鹿児島県日置郡市来町湊町3305番地
印　刷　㈱　朝　日　印　刷
〒890　鹿児島市上荒田町854－1